
荒ぶる王者～魔法の世界で列を成す～

黒松霊暫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荒ぶる王者〜魔法の世界で列を成す〜

【Nコード】

N8306S

【作者名】

黒松靈暫

【あらすじ】

不動遊星とのデュエルで勝つためデュエル修行に出ていた途中でジャックはリリカルな世界に行ってしまった！！果たして、デュエルしか能の無いジャックはどうやって生き延びていくのか？

若干キャラ崩壊や原作とは違うところもあります。そして場合によつてはオリカも使う恐れがあります。

プロローグ（前書き）

始めまして漆黒のカリスマです。初の小説ですが、宜しくお願いします。なお自分は文才がちょっと…あれなんで…指摘がありましたら宜しく願います！

それでは、プロローグですが…ほとんどジャックの説明みたいなものです。短いですが、どうぞお楽しみください！

プロローグ

「俺のターンッ！！」

太陽の日照りが水を蒸発させ湖も無い砂漠の世界にキュイイーン！と2つのホイール音が響き渡る。ホイール音の正体はこの世界での新たなデュエルのために必要不可欠な物『D・ホイール』。このD・ホイールに搭乗し、ハイスピードで疾走しながら、専用のファイルスピードワールドド魔法の影響の下、特殊ルールでのデュエルを行う。それが『ライディング・デュエル』

そのライディング・デュエルを今2人のデュエリストが行っている。1人は顔にマーカー（ネオ童実野シティ管内における犯罪歴のある者を対象とした不適合者の印）を付けたならず者のデュエリスト、そしてもう1人は白がメインのライディングスーツに身を包んだ『元』キングのジャック・アトラス。

何故元なのかは、かつて『サテライト』に居た頃の友『不動遊星』に『デュエル・オブ・フォーチュンカップ』のキングの座を賭けたデュエルで負けてしまったためである。キングの座を奪われたジャックは行き場を無くしどう生活してくかを悩んでいた。はつきり言っただけジャックには1人で生活するほどの能力は無い。しかし、ジャックはたくさんの友に救われ住む所を確保できた。

こんな駄目人間であるジャックだが、『赤き竜』の戦士である証の『シグナーの痣』を受け継いでいるデュエリストだ。『ダークシグナー』と決闘し『イリアステル』の脅威を掃い、最終的には全ての黒幕である『ゾーン』を倒しネオドミノシティを救った。（本当に救ったのは遊星ですが……いや、皆かな？）そんなジャックは今、ライバルである遊星を倒すべくデュエルの修行で今デュエルをしてい

るところである。

「俺は《ツイン・ブレイカー》を攻撃表示で召喚する！さあ、バトルだ！《ツイン・ブレイカー》で功」

ジャックが相手に攻撃を加えようとした刹那、腕のあるシグナーの痣が光だし思わず攻撃命令を中断してしまった

「なんだこれは！？ぐああああッ！！！」

痣が光だしたと思いきや目の前が光に包まれた。その眩い光に包まれたジャックはD・ホイールごと消えてしまった。デュエルの相手をしていたデュエリストも何が起こったか分からず砂漠の中心でただ呆然とするだけであつた……。

プロローグ（後書き）

いかがでしたか？次はジャックがリリカルな世界で闘います。最後にジャックらしいオリカを募集したいと思います！自分の方でも考えたものを物語にしますが。

基本的アニメのカードやオリカでは無いカードを使っていきます。ですがあらすじの にも書いたとおり場合によってはオリカを使うことがありますので、その事を考えての募集です。

まだ、駆け出しではありますが今後も自分の作品を宜しく願います。それでは次回で会いましょう！！

第1話「王者の鼓動 レッド・デーモンズ・ドラゴン」(前書き)

連投ですが、大丈夫ですかね？

指摘がありましたら宜しく願いします!!

第1話「王者の鼓動 レッド・デーモンズ・ドラゴン」

「くっ！ いったいなのが起こったというのだ！！」

突如光の包まれ気が付いたと思ったなら見知らぬ場所に居たジャック。それに先ほどまで太陽が輝いていたというのに今は星が煌く夜だった。

「痣が光だしたと思いきや目の前が光に包まれ気づいたと思ったら見知らぬ場所。オマケに夜になっている。（シグナーの痣が光出したと言う事は、赤き竜がまた何かの脅威が迫っていると知らせたのか？）」

夜空を見上げながら今までの赤き竜が知らせたことを思い出していた。ダークシグナーは青い炎がナスカの地上絵にそり燃え上がっていた。最初は何のことだか分からなかったが後々から赤き竜が伝えたかったことが明らかになった。

だとすれば、今回も何かが起きるのかもしれない。ジャックはそう思い早く遊星達の下へ行かなければと思いD・ホイールに乗ろうとした時、薄気味悪い声が響き渡った。

「……………！！！」

「何だ！？ こいつは……《スピア・ドラゴン》か！ と言う事は何処かにデュエリストが」

「……………！！！」

目の前にいるスピア・ドラゴンを観察していると突撃してきた。ジャックは咄嗟に転がるように避ける。

「このモンスターの攻撃で地面が！？こいつ実体化しているのか！」

「……………！」

「（くっ！いったいどうすればいいのだ！！避け続けるにも俺の体力が尽きてしまえば……あの攻撃力だと体が押しつぶされてしまう！）」

モンスターの攻撃を避け続けるジャック。しかし、ジャックの体力も無限大ではない。尽きてしまえばその場で攻撃を受けてしまう。

ジャックはモンスターが攻撃した場所をチラッと見る。コンクリートで固められた地面が深く抉られている。こんな攻撃を受けてしまえばひとたまりも無いだろう。

どうする？と悩んでいるとデュエルディスクにセットされている自分のデッキが光だしたではないか。ジャックは不審に思ったが今は迷っている暇は無い！

「これは賭けだ！！ドローッ！俺は《マッド・デーモン》を召喚！カードを1枚セットしてターンエンド！！」

デッキよりカードを5枚引きさらにもう1枚を引き手札のマッド・デーモンを召喚しカードを1枚セットしターンエンドをしたジャック。そして相手が動くのを待つ。

「……………！！」

「攻撃してきたか！《マッド・デーモン》は攻撃された時、守備表示になる！」

「……………！！！」

「ぐあああッ！！！」

スピア・ドラゴンはマッド・デーモンを攻撃し破壊した。するとジャックにすさまじい衝撃が襲った。そしてライフカウンターの数値が4000から3200に減っていた

「ダメージも実体化しているのか！（しかし、いったいどう言う事だ？確か《スピア・ドラゴン》の攻撃力は1900、そして《マッド・デーモン》の守備力は0、本来なら1900のダメージを受けるはず…それに攻撃命令の声が聞こえてこなかった…）俺のターンッ！！相手フィールドのみにモンスターが存在する場合、《バイス・ドラゴン》を特殊召喚！さらに《ダーク・リゾネーター》を通常召喚！」

ジャックは相手の攻撃力を超えるモンスターを出すべくお決まりコンボでフィールドにバイス・ドラゴンとダーク・リゾネーターを召喚した。

「行くぞ！！レベル5《バイス・ドラゴン》にレベル3の《ダーク・リゾネーター》をチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るが良い！！シンクロ召喚、我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！！！」

「……………！？」

静かな夜の道に赤く燃え上がる龍が咆哮を上げ現れる。ジャックの魂のカード、レッド・デーモンズ・ドラゴンだ。

「《レッド・デーモンズ・ドラゴン》で攻撃！ アブソリユート・パワーフォーッス！！！」

「……………ッ！！？」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの攻撃によつて全身が燃え上がり苦しむスピア・ドラゴン。しかし、スピア・ドラゴンは破壊されない。いったいどうなっているんだ？止めをさそうとするとスピア・ドラゴンは慌ててジャックの目の前から逃げていった。ジャックも慌てて後を追うためD・ホイールに乗り追いかける。

「くそッ！何処へ逃げたんだ！逃げ足の速い奴だッ！！」

思ったよりも逃げ足は速かった。ジャックはレッド・デーモンズ・ドラゴンを夜空に残しながら先ほどのスピア・ドラゴンを探している。だが、見つからない。他の所へ行こうとD・ホイールをターンした時、後ろの方から桃色の光が輝いた。

「ん？何なんだ、あの光は？」

もしかしたら、その光の下に居るかもしれない。そう思いD・ホイールで桃色の光の下へと駆け出した。

??? side

「ふう…何とか倒せたけど」

「あのモンスターなんだか、すごく傷ついていた（僕では無いってことは…もしかすると僕のほかに『ジュエルシード』を狙っている者が?）」

深々と挟まれた道で会話をしている者が2人

1人は白がメインで青と赤色でカラーリングされているバリアジャケットを着ている少女、もう1人?いや、1匹は人語を話すフェレットだった。

「ねえ?あのモンスターってなんだったの?それにジュエルシードって」

「そこにいるのは誰だッ!!」

「!?!」

??? side out

「そこにいるのは誰だッ!!」

D・ホイールを止め不審な人影を見つけたジャックはモンスターを操っていた者と思い威嚇の声を上げる。しかし、実際に目にした者は…少女とフェレットだった。

「お前達、ここで何をしている?」

「えっと、その〜」

「今は危険だ。モンスターが襲ってくるかもしれん、早く親の下へ帰るんだな」

「え？今、モンスターって」

「フェレットが…喋った！？」

D・ホイールに戻ろうとした時、フェレットが喋り出した。ジャックはモンスターの実体化などにも驚いたが動物が喋ることにはさらに驚いた。

「もしかして、貴方があのモンスターにダメージを与えたんですか！」

「モンスターの事を知っていると言う事はお前達、奴が何処へ行つたのか知っているのか？」

「えっと〜……信じてもらえないと思いますが、あのモンスターは私が倒しました」

「なん……だと！？」

少女から信じられない言葉がでた。さすがにジャックも驚き疲れていてふうつと頭をかかえ一息つく。そして再び少女を見る。先ほどの事が本当か聞こうとしたが、遠くから聞こえるサイレンの音によってそれは遮られた。

「この音は…セキュリティか！チツ！今は逃げるぞ！こんな所にいたら捕まる！！」

「は、はい！！」

モンスターがいないと分かりとりあえずレッド・デーモンズ・ドラゴンのカードをデッキに戻し少女を狭いD・ホイールに乗せ、アクセル全開でその場を離れた。このあと、ジャックは衝撃な言葉を聞くことを知らない。そう、ここが自分のいた世界ではないと言う事を……。

第1話「王者の鼓動 レッド・デーモンズ・ドラゴン」(後書き)

ちなみにジャックが伏せていたカードは《破壊神の系譜》です。このカードで一氣に相手を倒すはずがモンスターが破壊されなかったと守備表示にならなかったため使うことができなかったわけです。

この世界のことは次回のお話で明らかになります。ついでに今回謎だったダメージの事もです。

それでは次回また会いましょう！

第2話「漆黒の魔導師」(前書き)

まだ、通常デュエルはありません。

次くらい…ですかね？それでは本編へどうぞ！！

第2話「漆黒の魔導師」

「ここまで来れば大丈夫だろう」

「はにゃゝ、頭がくらくらするゝ」

「結構、早かったねゝ」

D・ホイールで全力で逃げていたジャックと少女とフェレットは公園に来ていた。さすがにあの狭いD・ホイールで2人乗りはきつかったらしく少女とフェレットは体がゆらゆらと揺れていた。

「さて、フェレット！さっきの話の続きだが」

「は、はい。あのその前に僕はユーノ・スクライアと申します」

「あ、私は高町なのはつて言います！」

「俺はジャック・アトラスだ」

まだ、ゆらゆらしているがとりあえず自己紹介を済ませたジャック、ユーノ、なのは。

そして、先ほどの話の続きをした。

「なるほど、そのカードのモンスターでダメージを与えたわけですね」

「そのカードってなんですか？」

「何？デュエルモンスターズを知らんのか！」

「でゆえる、もんすたーず？」

さすがにデュエルモンスターズを知らないことにジャックはショックを受けた。デュエルモンスターズは全国何処でも人気のカードゲームだ。ジャックが知っている限りでは修行の旅であった子供達は全てデュエルモンスターズを知っていた。もちろん目の前にいる少女ぐらいの年の子もだ。

「あ、このモンスターカツコイイですね！」

「ん？《レッド・デーモンズ・ドラゴン》か。ふつ、当然だ！コイツは俺の魂のカードだからなー！」

「……あのジャックさん、ちょっといいですか？」

なのはにカードを見せているとレッド・デーモンズをカツコイイと言われ上機嫌になるジャック。そこへユーノが真剣な顔で話しかけてきた。

「もしかするとジャックさんは別次元の人間なのかもしれません」

「どうゆう意味だ？」

「少なくとも僕が知っている限りではそんなカードがある所はありません。おそらくは何らかの力でこの世界に来たのかもしれませんが」

「何らかの力…（まさか、赤き竜が俺を別次元に？……にわかには信じられんがデュエルモンスターズが無いと言う事は……信じるし

かないか」

ジャックは自分の右腕を見つめながらこっちに來た時のことを思い出してきた。太陽が照らす砂しかない砂漠から星が照らすコンクリートで固められた見知らぬ町……赤き竜の痣が光だし目の前が真っ白になり気がつけばここにいた。

「ジャックさん、お願いがあります」

「頼み？」

「はい。できれば、ジュエルシードを集めるのを手伝ってくれませんか？」

「ジュエルシードとは《スピア・ドラゴン》の額にあつたあの青い宝石のことか？」

モンスターの額に輝く物があつたから気になって覚えていたが、ここでその正体に分かるとは思ひもしなかつたジャックである。

「はい。ジャックさんが知っているモンスター、そしてジュエルシードがそのモンスターに付いているというのがどうも気になるんです。だから、ジュエルシードを集めていけばジャックさんが何故この世界に來たのかが分かるかもしれない。どうですか？」

「うむ……いいだろう！このジャック・アトラスがジュエルシードを全て集めてやろうー！！」

「あのーお話が終わったところでちょっといいですか？そろそろ私帰らないと……」

「あ、そうだったね。そういえば、ジャックさんは住む所はあるんですか？」

「無いに決まっているだろ！俺はこの世界に来たばかりだぞ！！」

などと言うジャック。さすがのユーノもそんなことを自信溢れる声で言われてはたじたじだ。そんなジャックになのはは自分の家に来ませんか？と提案した。ユーノもジュエルシードを集める手伝いをしてくれるので自分は良いといってジャックはなのはの家に居候する事になった。しかし、この後の事が大変だったことにジャックはまだ気づいてはいなかった……。

「それじゃあ、今日は床で寝ることになるんですが…大丈夫ですか？」

「ふん。1日ぐらい余裕だ。お前も早く寝るんだな」

「はい。おやすみなさい」

とりあえずは明日になるまでなのはの部屋で寝ることになった。明日、両親にジャックをこの家に居候させることを話すらしい。

「（この世界で俺はいつたい何をすればいいのだ？痣が光ったと言う事は遊星達もこっちに来ているのか？……そうだとしたら合流しなければな。そういえば、今日のデュエル…あのダメージの謎がまだ分からん。なぜ、800ポイントしか減らなかったんだ？）」

寝転がりながらデッキのマッド・デーモンを見つめながら今日のスピア・ドラゴンとの戦いを思い返していた。普通のデュエルであればダメージは1900ポイント受けるはずだった。しかし、800しか受けなかった………ということだ？

「（ん？待てよ、800……まさか！）」

あの時のダメージは攻撃力の半分かと思っていたが、それだと900ポイント受けるはずだ。じゃあ何だ？とカードをくまなく見ているとジャックの目はレベルのところで止まった。

「（まさか、この世界のデュエルはモンスターが破壊されるとそのモンスターのレベル×200のダメージを受けるのか？だとしたらより高いレベルのモンスターが破壊せれるとその分ライフがどんどん減っていくことになると言う事が………だったら、守備の時はどうだ？）」

色々と考えていると知らないうちに寝ていたジャック。しかし大体はこの世界のデュエルを理解してきた。あとは実戦の時に確認するだけだ。

「朝 高町家リビング」

「「……………」」

「あのーお父さん？お兄ちゃん？聞いてる？」

「あらあら、2人とも何を勘違いしているのか。大体は分かるけど」

「そうだね」

「（何だ？この重苦しい空気は…？）」

朝になりなのは家族にジャックを居候させること話すからリビングに集まっつてと言われ集まったのは良いが、父親である高町士郎と兄の恭也が少し勘違いしているようだ。母親の桃子と姉の美由希は分かっているようだが……。

「（と、父さん！）」

「（恭也！お、落ち着くんだ！なのはが…まさか、そんな…）」

「（だけど！相手を見るんだ！外国人でしかもかなりの美形だぞ！）」

「（いったい…どうすればいいんだッ！！！）」

親バカとシスコンの2人が目の前にいるジャックを見てこんなことを考えてなのは言葉に耳を傾けようとしな。さすがにそろそろ気づいてほしいと思って桃子が2人に声をかけた。

「2人とも何を勘違いしているかは…まあ、分かるけど…なのは話を聞いてあげないと」

「そうだよ！恭ちゃんもかなりの勘違いしているだろうけど、その考え違うと思うよ！」

「そ、そうだな！な、なのは？話っているのは？」

何とか少しは落ち着いた2人。そして士郎はなのはが何を話すのか聞く。なのははやっと話せると2人の行動に少し疲れたのか、ため息をつき話す。

「実はね、この人…ジャックさんって言うんだけど…この家に居候させてほしいのー!」

「い、居候？なのは？その…ジャック君とはどういった関係だ？」

「え？え〜と……（なんて言えばいいんだろう？……そうだ!）えっとね、お互いの秘密を知っている者同士…かな？」

「（と、父さん！それってまさか!）」

「（まさか……）」

なのはの言葉に2人に脳はフル回転しあっち方面の考えをしてしまった。さすがにその言い方はまずいのでは？と桃子と美由希は思った。

「なのは、何時になったらこの2人は納得してくれるのだ？」

「さ、さあ？」

「ジャック君？私達はもう分かったけど…この2人はちょっとね」

「大丈夫だよ！私達が何とか言い聞かせるからー!さあ！こっちに行くよ、恭ちゃん!」

「ほらほら、あなたもよ」

何処へ連れて行ったのかは分からないが、帰ってきた2人は何故かは知らないがジャックを笑顔で迎え入れていた。いったい…2人の身に何が起こったのか？

夕方 海鳴神社

高町家にお世話になることになったジャック。それから何かを手伝うのが普通だが、ジャックは無理だろうと誰もが思っていたが…なんと！皿洗いはぐらいはできるようになったらしい。そんな高町家での暮らしから数日…今は新たなジュエルシードを封印するため神社に来ている。

「今度は、『フレムベル・ヘルドッグ』か。なのは！俺がコイツを引き付けている間、攻撃をするんだ！いいな！！」

「は、はい！！」

「行くぞ！俺は『バリア・リゾネーター』を守備表示で召喚！カード1枚セツトしターンエンド！」

今回は守備表示にして破壊された場合どうなるのか、確かめるべくモンスターを守備にした。

さっそく相手が攻撃しバリア・リゾネーターが破壊された。

「何も変化は無しか。（これで分かった。攻撃表示のまま破壊され

るとレベル×200のダメージを受け、守備表示の時は貫通以外はいくら破壊されてもダメージを受けない。)俺のターンッ！俺は《ダーク・リゾネーター》を守備表示で召喚！ターンエンド！」

戦闘では1度は破壊されないダーク・リゾネーターを守備で召喚しなのはに攻撃の隙を作る作戦に出たジャック。そしてジャックの狙い通り相手のモンスターの攻撃を耐えるダーク・リゾネーター。

「なのは！今だッ！」

「はい！デイベイイン・バスターッ！！」

「俺も続く！俺のターンッ！！俺は《ツイン・ブレイカー》を召喚！そしてバトル！行けッ！」

「……………ッ！！？」

なのはの砲撃とツイン・ブレイカーの斬撃でジュエルシードと普通の犬に戻る。

なのはは手に持っている杖『レイジングハート』でジュエルシードを封印した。

「これで2つ目だな。あとは19個…か」

「まだまだ、遠いですね」

「うん。だけど、2人がいればすぐに集まるよ！」

それからはモンスターではなくジャックの知らない物体達の相手をした。さらに夜現れたスピード・ウォリアーを倒し封印した。

ジャックは懐かしいモンスターに出会って仲間の事を思い出していた。なのはちよつと疲れたらしく歩くのもやつとだったのでジャックがD・ホイールに乗せて家に帰る事に……これで、封印したジュエルシードは6つ、本当にすぐ集まりそうだな。そして次なるジャックの仕事は……。

「それじゃあ！いつてきまゝす！！」

「元気の良い奴だ」

「それがなのはの良いところだからな」

今回はなのはの友達である月島すずかの家になのはと恭也と一緒に行くことになった。

さすがにD・ホイールは家に置いて来た。1人だけ乗り物で行くのはさすがに駄目だろう。

「これから行く月村邸はいつたいどんな所なのだ？」

「そうですねー一言で言うとても豪華な家です！！」

「確かに豪華だな」

ジャックにとって豪華と言う言葉はネオドミノシティのトップぐらいしか知らない。別世界の豪華とはどれぐらいなのか想像もつかないだろう。そんなことを考えていると、あつと言う間に着いてしまった。

「いつ来てもすごいな」

「（なるほど、ビルではなく一軒家か）」

「早く入ろうよ！」

なのは友達と会うのが待ち遠しく恭也の手を引っ張る。

恭也はそんなのはの行動を見て苦笑しながら月村邸に入って行った。

「お待ちしていました。それではこちらにどうぞ」

扉を開くと月村家のメイドであろう女性がお辞儀をして現れた。礼儀正しい態度で3人とある部屋へと案内させる。

「あ！なのはー！！」

「なのはちゃん、いらっしやい♪」

「アリサちゃん！すずかちゃん！」

部屋に着くなり2人の少女の下へ駆けて行くのは。どうやら2人がなのはの友達ようだ。

楽しそうにしている3人の傍から1人の女性がジャックに声をかける。

「貴方が、ジャック・アトラスさんですね？始めまして、月村忍といます。そしてメイド長のノエルとすずか専属メイドのファリンです」

「「宜しく願います」」

「ジャック・アトラスだ」

挨拶を済ませたら忍と恭也は2人で何処かへ行ってしまった。
ジャックはなのは達とお茶を飲みながら話に華を咲かせていた。

「ねえ？その機械なんなの？」

「これか？これはデュエルディスクだ」

「どうやって使うんですか？」

「それはな……」

話そうとした時なのはが服の裾を引っ張る。どうやらジュエルシードの反応があったらしい。何とか2人をごまかして反応のあった森へと来たジャック、なのは、ユーノだが……。

「でかいな」

「でかいですね」

「多分、猫の純粋に大きくなりたいと言う願いにジュエルシードが反応したんだろうね」

さすがに猫を攻撃するのは心が痛むので別の方法を考えていると……。

「フォトンランサー」

「え？」

「攻撃だと！？いったい誰だ！」

黄色い魔力の攻撃を食らった猫は苦しみもぐ。なのはとジャックはいったい何処から攻撃したのか周りを見回す。そして見つけたのはなのはと同じぐらいの年の漆黒のバリアジャケットに身を包んだ金髪の少女だった

「他にも魔導師が……邪魔をするのなら！」

「なのは！コイツの相手は俺の任せろ！お前はその隙にジュエルシードの封印を！」

「分かりました！」

「させない！」

「お前の相手は俺だ！《インターセプト・デーモン》を召喚！行け！」

なのはが猫の方へ向かおうとした時、漆黒の少女は止めようとなのはの方へ向かう。

しかし、ジャックはインターセプト・デーモンを召喚しそれを阻止する。

「邪魔を……しないで！フォトンランサー！」

「《インターセプト・デーモン》の効果！相手プレイヤーが攻撃宣言をした時、相手に500ポイントのダメージを与える！」

しかし、攻撃を軽く避けられ破壊される。そしてライフは800ポイント削られた。

さらに、隙ができたことにより少女はなのはの方へ向かい攻撃を加えようとする。ジャックはそれを阻止するべくデッキからカードを引きモンスターを召喚した。

「させるか！《バトル・フェーダー》を特殊召喚！」

「させませんよ。罨カード《天罰》」

「何！？」

バトル・フェーダーで少女の攻撃を止めようとしたが、謎の音が発動した天罰により破壊された。

「何者だ！」

「ふふ、今は知らなくてもいい。さらばだ、ジャック・アトラス」

「貴様！何故俺の名前を！！」

結局声の主は現れず、なのははジュエルシードを少女に取られたらしい。

その晩、ジャックは考えていた。天罰を使った謎の声の主の事を…もしかすると今までのモンスターはそいつの仕業では？と布団に入りながら考えていた。

第2話「漆黒の魔導師」（後書き）

次回予告

「貴様！この俺ことを何処で知った！」

「ふふ、そんなに知りたいのならデュエルで勝てたら教えてもかまいませんよ？」

「いいだろう！このジャック・アトラスに挑んだこと後悔させてくれるッ！！」

「次回荒ぶる王者！魔法の世界で列を成す」

『燃え上がる破壊の竜！レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスタ

ー』

ライディングデュエルアクセレーション！！」

第3話「燃え上がる破壊の竜レッド・デモンズ・ドラゴンノバスター」(前書

今回は通常のデュエルがあります。タイトル通りキーカードはレモンバスターです。

それでは、どうぞ!!

第3話「燃え上がる破壊の竜レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター」

「ここが、銭湯と言う所か。初めて来たな」

「そうなんですか？ ジャックさんの世界には銭湯は無いんですか？」

「ああ。でかい風呂なら入ったことはあるがな。それにしてもまさかアリサとすずかも付いて来るとは」

ジャックは今高町家と一緒に銭湯に来ている。彼のいた世界には銭湯と言う物は無かったので若干期待に胸を躍らせている。今回は高町家とジャックだけだと思っていたがなぜかアリサとすずかも付いて来ている。これは自分の解釈なのですが、実際5D・sの世界には銭湯とか温泉はあるのでしょうか？

「何よ？ 来ちゃいけないって言うの！」

「まあまあ、アリサちゃん落ち着いて」

「とにかく一旦荷物を置いてから温泉に行こうよ！！」

車から荷物を降ろし予約しておいた部屋に荷物を置きなのは、アリサ、すずか、ジャックの4人は早々と温泉に向かっていった。

「それじゃあ、私達はこっちなので」

「ああ。また後でな」

「こら！ ユーノ、暴れないの！！」

男湯よ女湯の別れるところまで来てユーノが暴れ出した。何か伝え
たかったようだがジャックは気にもせず男湯の方へと入って行った。

「ふむ。この浴衣と言つのは着慣れんな」

「そうですか？慣れればそうでもないですよ？」

温泉から出て浴衣姿の4人は楽しそうに話しながら廊下を歩いてい
た。すると目の前でとある女性が話しかけてきた。

「はあゝい、おチビちゃんたち」

「はい？」

「ふんふん。君かね？ウチの子をアレしちゃっててくれるのは」

「え？え？」

「あんま賢そうでも強そうでもなし……。ただのガキンチョに見え
るんだけどねえ」

なぜか女性は訳の分からない事を言つてなのはをジロジロと見てく
る。なのは何のことだが分からずジャックに助けて欲しいという
目で見える。ジャックはそれに気づいたのかなのはの前に出て女性に

怒鳴りつける。

「おい！貴様！なのはに何のようだ？なのはの知り合いなのか？」

「ん？……あつはははは！ごめんごめん、人違いだったかな！知ってる子に良く似てたからさあ」

「え、ええつと……」

今のところは、挨拶だけね

「「ッ！？」」

忠告しとくよ。子供は良い子にしてお家で遊んでなさいな。おイタが過ぎるとガブツと行くわよ？

ジャックが怒鳴りつけると女性は少し考える素振りを見せる。そして突然大声で笑い転げる。なのはとジャックは呆然としているが女性が去り際になのはに念話を贈りつけてきた。

なのはとユーノはその念話に目を見開く。その念話によりなのはとユーノは女性が魔導師である事に気づいた。ジャックはなのはが俯いているのを見て声をかける。

「どうした？」

「ジャックさん……あの人……魔導師かもしれません」

「！……そうか」

その言葉を聞いてジャックは拳をギュツと握り締める。もしかするとまた闘うかもしれない。その時の対処を考えていた。今まではモンスターばかりだったが、今回は人間が相手だ。

自分のいた世界では実際にダメージを受けることもあった。しかし、今回はデュエルではない。純粹なる戦闘だ。間違えば命を奪う可能性もある。

そんなジャックになのは大丈夫ですよ！と空いてるほうの手を両手で強く握れ締めてきた。なのはの気持ちにジャックはふっと笑い覚悟を決めた。

「ここか？ジュエルシードの反応があつたのは？」

「はい。正確にはこの先の橋の下ですが」

「なら、早く行こうよー！」

そう言つて林の中を走るなのは。しかし、草に足を取られなのははボタン！と勢い良く顔面から転んだ。

ジャックは慌てて転んだのはを抱き起こす。なのははにやははと笑つて誤魔化する。ジャックとユーノは、はあと頭を抱え苦笑する。

それから転ばないように気をつけながら進む。そして林を抜けるとそこには以前出会った漆黒の少女とさつき銭湯で会った女性がいた。

「子供は良い子でって、言わなかったっけか？」

「……わたしは子供ですけど、「良い子」じゃないです！」

「それを、ジュエルシードをどうする気なんだ！それは、危険な物なんだ！」

「？さあね。答える理由が見当たらないよ。……それにさあ、アタシ親切に言っただよ？良い子でないと、ガブッて行くよって……」

女性は肩甲骨の辺りまで伸びていた髪は身長以上に長くなり、腕はビキビキと姿を変える。すると女性は橙色の体毛を生やした一匹の狼になって睨みつけてくる。

「やっぱり、あいつあの子の使い魔だ！！」

「使い魔？」

「そうさ。アタシはこの子に作ってもらった魔導生命。製作者の魔力で生きる代わり、命と力の全てをかけて護ってあげるんだ」

なのはは少し腰が引けていたがジャックは仁王立ちしたまま女性を睨みつける。女性はジャックに気づき話かける。

「おやあ？あんたは、あの時私に怒鳴りつけてきた男だね。あんたも魔導師かい？」

「俺は、デュエリストだ！」

「デュエリスト？…まあ言いや。フェイト、先に帰ってて。すぐに追いつくから」

「うん。無茶しないでね」

そう言うのと鋭い爪でなのはに襲い掛かる。しかしなのはの肩に乗っていたユーノが防御結界を張って攻撃を止める。

「なのは！ジャックさん！あの子の事をお願いします！」

「ッ！させるとでも！！」

「させて見せるさ！！」

展開した魔方阵がユーノと女性はそこから姿を消した。なのははいったい何処へ行ったのか周りを見ますが、何処にもいない。すると目の前にいる少女が話しかけてきた

「防御結界に強制転移魔法…良い使い魔だ」

「ユーノ君は使い魔じゃない！お友達！」

「ふん！ずいぶんと余裕だな！2対1で勝てるとでも」

「ふふ、それは間違いですよ？2対2です」

ジャックがディスクを構えると少女の隣にローブを身に纏った謎の

人物が現れた。声からして性別は女を言うのは分かる。少女は突然の事なので少し身を引いた。

「誰!？」

「ふふ、そう身構えないでください。私の正体はお教えできませんが少なくとも貴方の味方でありますよ、フェイト様」

「その声…貴様か!あの時、俺の邪魔をしたのはッ!！」

「その通りですよ。さて、ここでは少々目立つので場所を変えましょう」

ローブの女性は天に手を掲げ指をパチン!と鳴らすとジャックの足元に魔方阵が展開した。そして光に包まれその場からジャックとローブの女性は姿を消した。

「くッ!ここは…何処だ!」

「ふふ、あの場では少々目立つので場所を移して結界を張っておきました。これでどんなに暴れても大丈夫です」

気が付くと回りは景色も何も無い真っ白な場所だった。そしてローブの女性は身に纏っていたローブを脱ぎ捨てた。そこには赤く燃え上がるような長髪で獲物を逃がさないと言いたげな鋭い目をした女性が現れた。

「私の名は…そうですね…『スレイヤー』とでも言っておきましょうか」

「殺害者…か。貴様！俺のことを何処で知った！！」

「ふふ、そんなに知りたいのならデュエルで勝てたら教えてもかまいませんよ？」

「いいだろう！このジャック・アトラスに挑んだこと後悔させてくれるッ！！」

久々に通常のデュエルができる事にジャックは心を躍らせるところだが今は目の前にいるスレイヤーを名乗った女性の正体が気になるところだ。

「デュエル！！」

ジャックLP4000 手札5

スレイヤーLP4000 手札5

「俺から行かせて貰う！ドローッ！俺は《ダーク・リゾネーター》を守備表示で召喚！カードを2枚セットしターンエンド！」

ダーク・リゾネーター

守300

ジャックLP4000 手札3

場 ダーク・リゾネーター 伏せ×2

「私のターン、ドロー！私は《神獣王バルバロス》を攻撃表示で召喚！この召喚条件で召喚した時、攻撃力は1900となる。そしてバトル！！」

神獣王バルバロス

功3000 ↓ 1900

槍を持った獣の王がダーク・リゾネーターに襲い掛かる

「《ダーク・リゾネーター》は1ターンに1度戦闘せは破壊されない！」

「そんなことは分かりますよ。速攻魔法《禁じられた聖杯》！この効果により貴方の《ダーク・リゾネーター》の効果が無効にして攻撃力を300ポイントアップさせます」

ダーク・リゾネーター

功1300 ↓ 1600

「これで、破壊耐性はなくなりました！砕け散りなさい！トルネード・シェイパー！！」

ダーク・リゾネーターは効果を失い回転する槍によって破壊された。

「カードを2枚セットしてターンエンドです」

スライヤーLP4000 手札2

場 神獣王バルバロス 伏せ×2

「俺のターンッ！相手フィールドのみにモンスターが存在する時、このカードは攻守を半分にして特殊召喚できる！来い、《バイス・ドラゴン》！！！」

バイス・ドラゴン

功2000↓1000 守2400↓1200

「さらに！《トラスト・ガーディアン》を通常召喚！そしてレベル5《バイス・ドラゴン》にレベル3の《トラスト・ガーディアン》をチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！」

光の輪となったトラスト・ガーディアンはバイス・ドラゴンを包み込み光の柱となる

「シンクロ召喚！我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン

功3000

「出てきましたか。シグナーの竜」

「行くぞ！《レッド・デーモンズ・ドラゴン》で攻撃！アブソリュート・パワーフォースッ！！」

手に炎を纏わせバルバロスに攻撃をする。しかしスレイヤーはクスツと笑い出す。

「速攻魔法《禁じられた聖杯》！バルバロスの効果を無効にして攻撃力を300ポイントアップさせる！！！」

神獣王バルバロス

功1900↓3000↓3300

「何！？2枚目だと！！」

「さあ！迎え撃ちなさい！！トルネード・シェイバーッ！！」

巨大化したバルバロスはレッド・デーモンズを迎え撃つ

「させぬ！《トラスト・ガーディアン》でシンクロ召喚したモンスターは1ターンに1度戦闘では破壊されない！」

「ですが、ダメージは受けてもらいます」

「ぐうう！！」

ジャックLP4000↓3700

「な、何だ！この痛みは！！？」

「おや？貴方は気づいていらしたのではないのですか？ダメージが実体化している事に…」

「貴様の仕業だったのか」

スレイヤーはクスクスと悪戯をした子供のようになにを嘲笑う。

「ええ。私は貴方の世界で言う『サイコデューリスト』と言う者です。と、言っても貴方もこの世界では似たような存在ですけどね。」

ふふ、この程度で倒れないでくださいよ？」

「くっ！ダメージステップ後レッド・デーモンズは攻守共に400ポイントダウンする。ターンエンドだ」

レッド・デーモンズ・ドラゴン

功3000 ↓ 2600 守2000 ↓ 1600

ジャックLP3700 手札2

場 レッド・デーモンズ・ドラゴン 伏せ×2

「私のターンッ！バトル！バルバロスで攻撃！トルネード・シェイパーッ！！」

「シンクロ・リフレクト 罾発動！シンクロモンスターが攻撃対象になった時、相手の攻撃を無効にし貴様のモンスターを1体破壊する！バルバロスを破壊！」

「甘いですね。カウンター罾《魔宮の賄賂》！《シンクロ・リフレクト》を無効にし破壊します。その後、貴方はカードを1枚引くことができます」

レッド・デーモンズを守ろうとしたが相手の罾により無効にされた。ジャックは渋々デッキよりカードを引く。

ジャック手札2 ↓ 3

「ならば！《トラスト・ガーディアン》の効果を発動！ ぐあああ！！（絶えろ！絶えるのだ！レッド・デーモンズ！！）」

ジャックLP3700↓3000

再びトラスト・ガーディアンの効果で破壊を免れる。しかしレッド・デーモンズはボロボロになっている。

レッド・デーモンズ・ドラゴン

功2600↓2200 守1600↓1200

「ボロボロですね♪ かわいそうに… カードを1枚セットしてターンエンドです」

スレイヤーLP4000 手札2

場 神獣王バルバロス 伏せ×1

「俺の… ターンッ!! 俺は《紅蓮魔竜の壺》を発動! 自分フィールドに《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が存在する時、デッキより2枚引く!」

ジャック手札3↓5

「(…このカードは… ふっ… 久々に使ってみるか。だが、その前に…) 《ダブル・プロテクター》を攻撃表示で召喚!」

ダブル・プロテクター

功700

「バトル! 《ダブル・プロテクター》でバルバロスを攻撃!」

「自棄になりましたか?」

ジャックの行動に笑い転げるスレイヤー。しかしジャックは意味も無くこんなことはしない。

ジャックLP3000↓400

「ぐおおお！！！！《ダブル・プロテクター》が戦闘で破壊された時、貴様のモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで半分にする！」

神獣王バルバロス

功3300↓1650

「レッド・デモンズで攻撃！アブソリュート・パワーフォースッ！！」

スレイヤーLP4000↓3450

「うう…なるほど、そう言う事でしたか。しかし！まだ、甘いですね！罫カード《神獣の魂》！このカードは自分の獣族、獣戦士族モンスターが戦闘で破壊された時に発動します。攻撃力を1000ポイントアップさせ復活！！さあ、蘇りなさい！！」

神獣王バルバロス

4000

再び、バルバロスが現れた。しかもパワーアップをしてさらに凶暴性が増していた。

「ですが、この効果により復活したモンスターが離れることで私は離れたモンスターの元々の攻撃力の半分ライフが削られますがね」

「カードを3枚セットしてターンエンド！」

ジャックLP3000 手札3

場 レッド・デーモンズ・ドラゴン 伏せ×4

相手モンスターの攻撃力を越えるカードは今のジャックには無い。
なので守りに転じるしかない。

「私のターンですね。ふふ、貴方が守備とはいつものパワーデュエルはどうしたのですか？」

「五月蠅い！さつさと進めろ！！」

「おや、怖い怖い。それでしたら、すぐに楽にして差し上げます！
！《不屈闘士レイレイ》を召喚！」

不屈闘士レイレイ

功2300

「バトル！バルバロスでレッド・デーモンズを攻撃！トルネード・
シェイパーツ！！」

「畏発動！《シンクロ・フォース》！シンクロモンスターが攻撃された時発動！貴様のバトルフェイズを強制終了させる！」

バルバロスの槍がレッド・デーモンズに当たる寸前で見えない壁により止められた。

「惜しいですね。カードを2枚セットしてターンエンドです。楽に
息の根を止めてあげようと思いましたのに……」

スレイヤーLP3450 手札0

場 神獣王バルバロス 不屈闘士レイレイ 伏せ×2

「俺のターンッ！！《ブレイカー・ジャイアント》を召喚！そしてこのモンスターをリリースし罨カード《ナイトメア・デーモンズ》を発動！貴様のフィールドにナイトメア・トークンを3体攻撃表示で特殊召喚する！」

スレイヤーのフィールドに3体の黒い人形の様なモンスターが現れた。

「さらに《ブレイカー・ジャイアント》の効果発動！このモンスターが戦闘以外でフィールドを離れた時、フィールド上の魔法・罨ゾーンのカードを1枚破壊する！俺は貴様の左のカードを破壊！」

空中から現れた巨人によってスレイヤーのカードは碎け散った。

「くッ！やりますね。（しかし、破壊するカードを間違えましたね。私の残るカードは《ヘル・ブラスト》このもし貴方がモンスターを破壊したらその時、貴方の最後です！）」

「ふん！貴様の考えている事はお見通しだ！俺がモンスターを破壊し、その時に何らかのバーン系のカードで俺の残り少ないライフを削ろうと言う魂胆だろうが…甘いぞ！」

「何！？」

まさかの自分がやろうとしていたことがばれていたことに驚きを隠せないスレイヤー

「俺のデュエルは貴様より3歩先に行く！！レッド・デーモンズをリリースし《バスター・モード》を発動！さあ！我が魂よ！紅蓮の鎧を纏い、その姿を再び現せッ！！」

フィールドのレッド・デーモンズが炎に包まれる。そして次の瞬間、炎の球体が爆発した。

「モードチェンジ！！《レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスター》
《！！！！》」

レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスター
功3500

「このモンスターは！？」

そこには紅蓮の鎧を纏った破壊を司る竜が咆哮していた。

「《レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスター》で《不屈闘士レイ》を攻撃！エクストリーム・パワーフォースッ！！！」

スレイヤーLP3450↓2250

「ああああ！！…しかし！これで貴方も終わりです！罨カード《ヘル・ブラスト》！お互いにレイレイの攻撃力の半分を受けます！消え去りなさいッ！！ジャック・アトラスッ！！」

「無駄だ！罨カード《バスター・カウンター》！フィールドに《ノバスター》と名の付くモンスターが存在する時発動！魔法・罨・モンスター効果の発動を無効にし破壊する！！！」

ヘル・ブラストは無効にされ砕け散った。

「そして、《レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター》の効果発動！ダメージステップ終了時、このカード以外のモンスターを全て破壊する！ クリムゾン・ジ・エンドッ！！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスターの口より高温の炎が解き放たれフィールドのモンスターが全て破壊された。

「そして、ナイトメア・トークンが破壊されたことよって1体につき800ポイントのダメージと貴様自信の《神獣の魂》の効果によりバルバロスの元々の攻撃力の半分、1500ポイント…合計3900ポイントのダメージを与える！！」

スレイヤーLP2250↓0

「うう…私の負けですね…まさかあの状況から逆転されるとは思いませんでした。完敗です」

スレイヤーは膝を突き痛むのだろう肩を抑えながら負けを認めた。

「そんな事はどうでも良い！さあ、教えてもらおう！誰から俺の事を聞いた！！」

「ふふ、仕方がありませんね。約束ですしね…我が主『プレシア・テストロッサ』様です」

「プレシア…そいつは何故貴様に俺を襲わせたのだ？」

「そこまではお教えすることはできません。それでは、またお会いできる事を願って……」

ジャックの質問に答えず虚空の彼方へと消えていくスレイヤー

「待て！……くそッ！逃がしたか。だが、俺を狙っている奴の事は分かった。……今はなのはの所へ戻るか」

「あ！ジャックさーん！！」

林を向けるとなのはとユーノがジャックに気づいたらしく駆け寄ってくる。しかし、なのははジャックの怪我を見て心配そうに見つめる。

「ど、どうしたんですか！？この怪我！！」

「少し…な。それよりもジュエルシードは手に入れられたのか？」

「え？それは…その…」

「何も言っな。お前の顔を見て理解した」

自分の怪我は気にするなと言ってかわしなのはがジュエルシードを手に入れたかを聞く。その事を聞かれなのはは目線を逸らす。

ジャックはそんなのはの様子を見て分かったらしくはあとため息をつく。しかし、焦ることは無い。ジュエルシールドはまだ、多数残っている。焦らずゆっくり封印すれば良い。

その後旅館に戻ったジャックは怪我の事で士郎達にみつちり絞られた。でも、これもジャックを心配してのことだと本人は知らない。絞られている時にチラツとなのは見た…若干暗い顔をしていたことは記憶に残っている。そうしたのだろうか？

く???く

「プレシア様、申し訳ありません。ジャック・アトラスの捕獲に失敗しました」

「あら？貴方と言う者が失敗とは……まあいいわ。次は必ず捕獲しなさい」

「はい」

傷ついたスレイヤーはふらつく体を引きずりながら主がいる場所へ転移し今ここにいます。そして自分が実行していた任務を失敗したことを報告した。

プレシアは玉座に座りながら不適な笑みを浮かべスレイヤーに次こそは成功させなさいと命令をする。スレイヤーは静かに返事をする。

「私に実験にはジュエルシールドだけでは足りない。そう、シグナーの力と荒ぶる魂……ジャック・アトラスの力が必要不可欠……アリスア……待っててね……。」

第3話「燃え上がる破壊の竜レッド・デーモンズ・ドラゴンノバスター」(後書

次回予告

「どうして、分かり合えないんだろう……どうして」

「何を悩んでいるかは知らんが…お前がすっかりなくてどうする！そんな事では、分かり合えることなど一生できんぞ!!」

「フエイトちゃん！話し合っただけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言っただけ！だけど、話さないと言葉にしないと伝わらない事もきつとあるよ!」

「邪魔はさせん！なのはの思いがあの子に伝わるまで俺が貴様の相手だ!!」

「次回荒ぶる王者！魔法の世界で列を成す！『伝える言葉』

ライディングデュエルアクセラレーション!!」

第4話「伝える言葉」（前書き）

さて、今回は原作で言う6話あたりですかね？

感想・指摘・オリ力募集！お待ちしております！！

第4話「伝える言葉」

「……ふむ。良い香りだ」

温泉旅行から帰って来て次に日の朝、ジャックは翠屋の席に座りモーニングコーヒーを飲みゆつくりしている。まだ、怪我が治っていないから休むようにといわれ此処にいる。

しかし、ジャックはこの前の出来事を気にしてじつとしてはいられず、デッキの調整をしている。そんなことをしているとなのはが起きて来てジャックに挨拶に来た。

「おはようございます…ジャックさん」

「ああ。…どうした？いつもの元気が無いようだ？」

「え？……そんなことはありませんよ！私はいつも元気いっぱいです！―」

「そうか？」

学校の制服に着替えこれから学校に行くのだろうが、なのはにいつもの元気が無い。ジャックは気になり聞いてみる。なのはは少し無理をして自分が元気であることをアピールする。

「それじゃあ、私…学校に行つて来ます」

「気をつけるのだぞ」

重い足取りで家に戻っていくのは。その後ジャックは自分がいなかった間何かあったのだろうか？としばらく考え再びデッキ調整に戻った。

「ただいま」

「ん？今日はアリサとすずかは一緒ではないのか？」

「あ、はい。2人とも用事があるそうで……それよりもジャックさんはずっとそこにいたんですか？」

「まあな」

店の扉の鐘がカランカランと音を響かせる。そこには朝から元気が無いのはが静かに帰ってきた。ジャックはアリサとすずかがいないことに気づき聞いてみる。なのははぎこちない笑顔で答える。

そしてなのはは気になったのでジャックにずっと此処にいたのかを聞いてくる。ジャックはコーヒーを飲みながら軽く答える。

「ジャックさん」

「ん？」

「人が分かり合うのに言葉は… 必要ないものなんですか？」

なのははストンツとジャックの隣に座って語り始める。なのはは悩んでいるあの少女と分かり合えないことを……ジャックは思い出していた自分も以前そんなことがあったことを…。

遊星を裏切りスターダストを奪いサテライトを去った事。あの時腹を割って話し合っていたればもしかすると遊星のことだ、分かってくれただろう。なのに話す事も無く遊星を騙しスターダストを奪いサテライトを去った。なのはも今は同じ事で悩んでいるのだろう。

「ジャックさん？」

「何を悩んでいるかは知らんが…お前がすっかりしなくてどうする！そんな事では、分かり合えることなど一生できんぞ…！」

「！？……そう…ですよね。ちゃんと伝えなくちゃ…私のやり方で…！」

この無邪気な笑顔を暗くしないためにも自分は自分にできることをしよう。夕暮れの空を見上げジャックはそう思った。

「ジュエルシードがこんなに輝いている。どう言う事だ？」

「とにかく封印を…レイジングハート…！」

『シーリングモード』

置くの方にある強く輝くジュエルシールド目掛けてなのはは封印のため砲撃を撃った。しかし別方向からも砲撃が…。

「リリカルマジカル！」

「ジュエルシールドシリアルXⅠV！」

「封印！！！」

同時に封印した。しかしジュエルシールドはまだ目の前に残っている。なのはは空から降りてくる少女を見つめた。

「この間は自己紹介できなかったけど…私、なのは。高町なのは。私立聖祥大付属小学校三年生……」

『サイズフォーム』

しかしなのはの言葉を聞かず自分のデバイスをモードチェンジさせる。

『フライヤー・フィン』

戦闘が始まった。ジャックは少女に後ろにいる女性の相手をしている。少女はなのはの後ろに回りこみデバイスで攻撃する。しかし、なのは素早く反応し背後をとる。

『デバイン・バスター』

『フォトンランサー』

レイジングハートに魔力が収縮し打ち放つ。少女も応戦するため魔力の球体を出し打ち放つ。

「フェイトちゃん！」

「!？」

なのはは少女：フェイトの名を強く感情を込めて呼ぶ。フェイトは突然呼ばれたので少しばかり驚き硬直する。

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど！だけど、話さないと言葉にしないと伝わらない事もきつとあるよ！」

「（そうだ。それでいい。お前はお前のやり方で分かり合え）」

「フェイト！」

「邪魔はさせん！なのはの思いがあの子に伝わるまで俺が貴様の相手だ！！」

なのはの語りにフェイトは耳を傾けている。ジャックはそんなのはの事を見て少しばかり微笑む。女性が止めに入ろうとしたがジャックがそれをバイス・ドラゴンで阻止する。

「ぶつかりあって競い合うのも仕方ないかもしれないけど、だけど……何も分からないままぶつかりあうのは……私、嫌だ！！」

「……」

「わたしがジュエルシードを集めているのはそれがユーノ君の探し物だから……ジュエルシードを見つけたのはユーノ君でユーノ君はそれを元通りに集めなおさないといけないから、わたしはそのお手伝いで。だけど……お手伝いをするようになったのは偶然だけど、今は自分の意思でジュエルシードを集めてる。自分の暮らしている街や自分の周りの人達に危険が降りかかったら嫌だから……」

自分がジュエルシードを集める理由をしつかりフェイトの目を見つめ大きな声で言う。

「これが、わたしの理由……!」

「私は……」

構えを解いたフェイトは口を動かす。自分の集める理由を述べようとしているのだろう。しかし、それを止める様に女性が割り込んだ。

「フェイト、話さなくていい!! あたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ!」

その一言でフェイトは我に返った。なのははそのまま硬直していた。フェイトが我に返った時、ジュエルシードが再び暴走の兆しを見せた。

「これは!?!」

「ジュエルシードが」

「こうなったら! 《ダーク・リゾネーター》を召喚! そしてレベル5 《バイス・ドラゴン》にレベル3 《ダーク・リゾネーター》をチュ

「ニング！」

ジュエルシードの暴走を止めるためレッド・デーモンズ・ドラゴンのシグナーとしての力で暴走を少し和らげようという魂胆だろう。

「シンクロ召喚！我が魂、《レッド・デー》させません！」何！？

召喚の途中でバルバロスがジャックに跳んできた。ジャックは召喚を止め転がる。

「貴様は…スレイヤー…！」

「フェイト様！早く封印を…！」

「！……分かった」

そして、フェイトはジュエルシードを両手で包み込む。ジャックはそんなフェイトを見て危険だと思い駆け寄るとしたが、スレイヤーによって遮られた。

「貴様！あのままではフェイトが危険だぞ…！」

「大丈夫です。今は魔力を送り暴走を止めようとしているだけです」

スレイヤーはジャックから目を離さずフェイトのしている事を説明した。だが、ジャックにはただフェイトが無茶をしているようにしか見えない。

「止まれ！…止まれ！……止まれ！…止まれ…！」

だが、それでも止まる様子はない。ジャックはどうしても助けようとしたがスレイヤーが邪魔をする。

「ジャックさん！この人の相手は私がします！フェイトちゃんを…救ってください！！」

「なのは……良からう！このジャック・アトラスが必ず救って見せよう！！！」

「この！邪魔を…！」

スレイヤーがフェイトに近づこうと移動するジャックを止めようとしたが、なのはの砲撃によって阻止された。

「おい！」

「だ、誰！？」

「コイツを握ればいいのだな？」

「！駄目！一般人が握るのは！」

ジュエルシールドを握っているフェイトにジャックは自分もやると言う。しかし、フェイトはジャックを一般人だと思い叫ぶ。

「ふん！このジャック・アトラスをなめてもらっては困る！」

「！？」

フェイトの言葉を見殺してジャックはフェイトの両手を強く握る。

すると、ジャックのシグナーの痣が光出しジュエルシードに何かのエネルギーを注ぎ込む。

「と、止まっ……た？」

「ざっと、こんなところだな!!」

「あなたは……いったい……？」

自分の力ではどうにもできなかったジュエルシードの暴走を一般人が止めた。フェイトはそれを理解できずジャックを見つめる。

「知らないのなら教えてやろう！俺はジャック・アトラス！お前と同じジュエルシードを集める者だ」

「ジャック……アトラス」

「フェイト様！その者からお離れください!!」

「ぐっ!？」

なのはの攻撃を掻い潜りジャックとフェイトの間に割り込んできたスレイヤー。ジャックは一旦距離を取る為バックステップをした。

「一時退散しましょう」

「……うん」

「な!?!待て!!」

しかし、相手の方が早く転移魔法で逃げてしまった。後からなのはが申し訳なさそうにジャックに近づいてくる。

「すみません！押さえ切れませんでした」

「まあ良い。とにかくフェイトが無事であれば……なのは」

「はい？」

「お前の伝えたいことは全部言ったか？」

夜空を見上げながらジャックはなのはに問う。なのはは不満そうな顔で答える。

「まだ……です。まだ……フェイトちゃんには全然伝えきっていません
！」

「そうか。ならば次はしっかり伝えるんだな」

「はい！！」

なのはは誓った今度こそフェイトに自分の気持ちを友達になりたいという気持ちをちゃんと伝えてやると……。

「……………（あの人の手……………言葉では現しきれないほど……………落ち着く暖かさだったな……………それに……………何か心の底から湧き出るような力……………なんだ

「つたんだろっ?」

「フェイト?どうしたんだい?」

「え?な、なんでもないよ!」

「いや、でも…さっきから両手を見つめてボツツとしているけど…
…!まさかね」

家に戻ったフェイトは手の治療をしソファに座っていた。アルフは少し様子の変なフェイトを心配して声をかけたがフェイトは顔を真っ赤にしてなぜか焦った様子でアルフの方を振り返る。

なんでもないと言うフェイトだが、アルフはそれでも心配する。どうしたんだろうと考えるとある事を思い出した。アルフはその事ではないかとニヤニヤしながらフェイトを見る。

「ど、どうしたの?アルフ…なんかおもしろい事でもあった?」

「もしかしてフェイト…あの男に惚れたのかい?」

「!?!?な、何言ってるの!わ、私は別に…」

「アハハ」こんなに焦るフェイトは久々だよ」

「あ、アルフ!!」

静かな部屋は楽しい笑い声で響き渡っている。フェイトはこんなにも感情を表せる子なのだとアルフは改めて認識した。フェイトと2人だけの部屋で楽しく追いかけてるのを楽しんでいる日々が

ずっと続けば良いのにと思っただけ……。

第4話「伝える言葉」（後書き）

次回予告

「だらしないわね。たった4つしか集められないなんて…」

「母さん……」

「また貴様か！いい加減俺を狙う理由を言ったらどうだ！！」

「時空管理局執務官…クロノ・ハラオウンだ！！」

「次回荒ぶる王者…魔法の世界で列を成す」

『時空管理局執務官クロノ・ハラオウン』

ライディングデュエルアクセレーション！！」

第5話「時空管理局執務官クロノ・ハラウン」(前書き)

何か…執筆しているうちに…恋愛の方へ向かっている感じがします。
気のせいですね？

第5話「時空管理局執務官クロノ・ハラウン」

「お土産は…これでよし」と

「甘いお菓子か…それであの人が喜ぶかねえ？」

早朝…フェイトとアルフはマンションの屋上に私服で話し合っていた。今日は母親にジュエルシードの集まり具合を報告するために出かけるそうだ。フェイトは母を思いお土産を持っていくらしい。しかしアルフはそれを見て不満そうな顔をする。

「分かんないけど、これは気持ちだから…」

「（そんなものかねえ）」

「（母さん…喜んでくれるかな？）…それじゃあ…行くよ」

魔方陣を展開して座標を声に出し読み上げた。すると2人は光に包まれ何処かへと転送した。

〈同時刻 高町家〉

「やはり…朝のコーヒーは良いものだ」

「コーヒーってそんなにいいですか？」

「なのはもう少し大人になれば分かるかもねえ」

高町家は朝食を食べているところだ。ジャックは早々と朝食を取り、モーニングコーヒーを飲んでいる。コーヒーを評価してるジャックになのはそんなにコーヒーはおいしいのか？と疑問に思い問う。その問いに姉である美由紀がご飯を口に運びながら答えた。

「そんなに気になるのなら飲んでみるか？」

「へ？…はい」

「お！なのはの初コーヒーだな」

おいしそうにコーヒーを飲むジャックが気になりチラチラと見ているなのは。その視線に気づいたジャックは自分の飲んでいたカップをなのはに突きつけ飲んでみるか？と言う。

なのはは一瞬考えたが、ジャックの手からカップを取ってジッと見つめる。土郎はなのはがコーヒーを飲むところを笑顔で見つめる。他の家族も同様だ。そして、口の中に入れた。

「どうだ？」

「……とても…苦いの」

「あはは、まだ、なのはには早かったようだね」

一口飲んだなのはにジャックは話しかける。するとカップをコトんとテーブルに置きなのははうえうえと舌を出し正直な感想を述べた。美由紀は笑いながらなのはの顔を見る。他の家族も自分の娘の今の顔を見て微笑む。

「ふん。お前にはまだコーヒーの美味さが分らんか。もう少し大人にならんな」

「うう…早く大人になりたいの」

「そう焦るなつて。人間には決められた成長スピードと言うものがあるんだ。焦らなくても大人にはなれるさ」

「その通りよ。それよりなのは？時間は大丈夫なの？」

テーブルに置かれたカップをジャックは手に取り直し飲みながらリラックス状態に戻る。恭也はなのはに人間の成長スピードのことを説明。そして桃子はそれに同意しながらなのはに学校に行く時間は大丈夫なのか？と聞く。

なのはは時計を見る。するとなのはは奇妙な声を上げ鞆を背負って玄関をバタバタと出て行く。恭也と美由紀もそれぞれ学校と用事で家を出て行く。残った士郎と桃子は店の経営を、ジャックはユーノを連れてなのはが学校に行っている間ジュエルシードの探索をするためコーヒーを飲み終えてから家を出て行った。え？皿洗い？……何のことでしょう？

〈別次元〉

「だらしないわね。たった4つしか集められないなんて…」

「母さん……」

ジュエルシードの集まり具合の報告に来ていたフェイトだが、なぜかフェイトは縛られボロボロだ。近くには杖を持ったプレシアが呆れた顔で立っていた。

「良いフェイト。貴方は大魔導師プレシア・テストロツサも1人娘……不可能などあつては駄目」

「……」

ボロボロのフェイトの顔を触りながら暗示をかけるかのように言い聞かせる。フェイトはただジツと見つめ言う事に答えるだけであった。

その後、静かな部屋にはフェイトの痛々しい叫び声しか響かなかった。部屋の外にいたアルフはそんなフェイトの悲痛の叫び声にただ黙って待つことしかできなかった。

「何で……何で……なんでなんだよ！自分の実の娘にあんな酷いことができるなんて……どうかしているよ！」

扉の向こうにいる自分の主を心配しながら何故こんな酷いことができるのか理解ができなかった。自分の……たった1人の娘に……こんな……酷いことができるなんて……。

「フェイト……ジュエルシードは母さんの願いを叶えるのにどうしても必要なの」

「はい…母さん」

「……まあいいわ。スレイヤー」

「はい、此処に」

フェイトに言い聞かせるのをやめ、自分の部下であるスレイヤーを呼ぶ。スレイヤーは暗闇から静かに膝を付け現れる。

「今からフェイトに次のジュエルシードを封印させに行かせるわ。あなたは近くにいるはずのジャック・アトラスの相手しなさい。もし、捕らえるチャンスがあれば…分かるわね？」

「かしこまりました」

「ジャック…？」

「そういえばあなたジャック・アトラスに救われたそうね？ジュエルシードの暴走を止めようとした時に…」

ジャックの名を聞きフェイトが反応する。プレシアはそういえばと気づきフェイトの方を向きなおす。

「貴方にも少しだけ教えてあげるわ。ジャック・アトラスは私の願いを叶えるために必要な存在の1つなのよ？」

「ジャックが…？」

「まあ…あなたはジュエルシードを集めることだけに専念しなさい。いいわね？」

「……はい、母さん」

話終わると縛っていた光の線が消えフェイトはその場に倒れた。プレシアは何も言わず置くの自室に戻っていった。フラフラと危ない足取りで部屋を出て行くフェイト。

「！フェイトッ！！」

ご主人が出てきたことに気づき慌てて倒れそうになるのを受け止める。

「ごめんよ！フェイト、大丈夫かい？」

「何でアルフが謝るの？…大丈夫だよ…全然…それよりもアルフ知ってた？母さんが欲しい物がまだあったんだって」

「え？そんなの初耳だね」

「それはね…ジャック…なんだって」

泣きながら自分の不甲斐無さにご主人であるフェイトに謝るアルフ。しかし、フェイトはそんなことは無いと言う。そして、新しい情報をアルフに伝える。

「ジャックって…あの白い魔導師と一緒に居た男のことかい？」

「うん。どうして母さんが必要としているかは分からないけど…（あの温もり……思い出しただけでも…感じる……）」

「フェイト？どうしたんだい…顔が真っ赤だよ？」

「え？うん…なんでもないよ！そ、それよりも早く次のジュエルシードを探しに行こう？」

手をブンブンと振って誤魔化すフェイト。アルフは気になったが今はボロボロのフェイトの体を支えるのに専念した。

「なのは！ジュエルシードの封印を！！」

「うん！」

ジャックの情報で次のジュエルシードが発見された。今はその封印のためユーノが人払いの结界をかけている。そしてなのはが砲撃を撃ち放とうとした時、空から黄色い魔力弾が複数飛んできた。しかし、今回の相手は簡単にはいかずバリアのようなもので防がれた。

「ほう…今回は一筋縄ではいかないようだな」

「あ！」

「ん？お前は…フェイトだったか？」

「あ、はい。えっと…その…あの時は…ありがとございました！」

驚きの声にジャックは振り向くとそこにはフェイトがいた。ジャッ

クは思い出したようにフェイトの名を呼ぶ。フェイトは少し緊張した様子であの時助けてくれたことにお礼を言った。

近くにいたなのはとアルフはそんなフェイトに行動にポカーンと開いた口が塞がらないでいる。ジャックは腕組をしながら気にするなと言いつづ。

「（ど、ということ？……まさか！フェイトちゃんがジャックさんのことを……いや！そんな……でも……！ああ！どうしよう……！頭が混乱してきたよ……！）」

「なのは！何をボクッとしている！ジュエルシードを封印するのはなかったのか……！」

「へ？あ、そうでした……！」

なのはが妄想しているとジャックはすでにモンスターを召喚して攻撃しているところであった。フェイトも攻撃をしている。なのはは自分だけが変わることを妄想していたことに少し反省しながら攻撃を開始する。

「《ビック・ピース・ゴーレム》で攻」

「畏カード《威嚇する咆哮》！」

モンスターで攻撃しようとした時衝撃波により攻撃をキャンセルされた。ジャックは声がした空へ頭を上げる。そこにはスレイヤーがデュエルディスクを構えていた。

「また貴様か！いい加減俺を狙う理由を言ったらどうだ……！」

「それは無理ですね。レイレイで攻撃!!」

「くそッ!」

ジャックLP4000↓3000

モンスターが破壊されライフが削られる。ジャックはカードを引き2枚カードを伏せダーク・リゾネーターを守備表示で召喚した。

「おや?あちらの方はそろそろ決着がつくようですね」

「何?」

良く見るとなのはとフェイトがジュエルシールドを挟んでにらみ合っている。スレイヤーに気を取られている間にジュエルシールドの封印まで行っていたらしい。

「こちらは足止めをもつしばらく続けますか」

「貴様!普通にデュエルをする気は無いのか?」

「ふふ、今はしませんよ。とてもじゃないませんが今の貴方には勝てそうにありませんから」

などと笑いながらバルバロスで攻撃をしてくる。しかしダーク・リゾネーターで防ぐ。すると、なのは達の方から眩い光が輝いた直後……少年の声が響き渡る。

「ストップだ!!」

「おや…これは少々厄介な者が来られましたね」

「何だ？」

「時空管理局執務官…クロノ・ハラオウンだ!!」

振り向けばそこにはなのはとフェイトのデバイスを受け止めいる少年がいた。時空管理局とはいったい何なのか？

第5話「時空管理局執務官クロノ・ハラウン」(後書き)

次回予告

「時空管理局……か。セキュリティみたいなものか？」

「ゆ、ユーノ君！？その姿は！？」

「ようこそ。待っていたわよ」

「次回荒ぶる王者！魔法の世界で列を成す」

『捕まったジャック』

「ライディングデュエルアクセレーション！！」

第6話「捕まったジャック」(前書き)

ゴールデンウィークも後半ですね……。

ゴールデンウィーク中は暇なのでかなり連投するかもしれません。

第6話「捕まったジャック」

「さあ、武装を解いてもらおうか？」

「時空管理局！（ジュエルシードが見の前にあるのに……！）」

ジュエルシードをめぐる戦いの間に割って入って来たのは時空管理局執務官クロノ・ハラウン……。年はなのは達より少し上ぐらいだろう……。見た目的に……。兎にも角にもお話は進んでいきます。フェイトはジュエルシードが目の前にあるのにクロノが邪魔をしてとることができない。

「フェイト！ここはいったん引くよ！！」

「その通りですね。魔法カード《大寒波》発動！」

「何！？」

スレイヤーがディスクにカードを入れた瞬間近くにあった水辺から大きな津波がクロノ達を襲った。クロノは防壁で防ごうとしたがなぜか発動しなかった。スレイヤーはモンスターにフェイトとアルフを乗せてクスクスと笑いながら説明をした。

「無駄ですよ。このカードを発動したのでしばらくは魔法を発動できません」

「ならば！レッド・デーモンスの攻撃！灼熱のクリムゾン・フレアッ……！」

「じゃ、ジャックさん！？今私達、魔法を使えないんですよ！！そんな強力な攻撃防げるはず」

「もう遅いようだぞ？」

「へ？うにやあああ！！！」

ジャックはレッド・デーモンズの攻撃で津波を防ごうとしたが、逆になのはとクロノを津波と炎のダブルアタックでノックダウンさせてしまった。そんな光景を去り際にスレイヤーは笑い転げていた。

「ジャックさん？覚悟はいいですか？」

「M A T T E ！！」

「お仕置きなの！！！」

「ぐああああああッ！！！」

それから数分で魔法を使えるようになったのははジャックをバインドで縛りゼロ距離でデインバスターを放ったそうだ……。

「君…本当に大丈夫か？」

「このジャック・アトラスとなめてもらっては困る！！この程度の

ダメージどうと言う事は無い!!」

「私は悪くは無もん!! ジャックさんが悪いんですからねッ!!」

「まあまあ、なのは落ち着いて」

なのはのお仕置きから生還したジャックは強がっているが、かなり体がボロボロだ。さすがのクロノでも同情するしかない。なのははなのはで膨れっ面で自分は悪くないと言いそれをユーノが落ち着かせている。

「怒っているとこ悪いがそろそろバリアジャケットを解除したらどうだ？」

「あ! そうでした」

怒りでバリアジャケットを着ている事をすっかり忘れていたらしく慌てて解除する。

「君もいつまでもその姿じゃ窮屈だろ? 元の姿に戻ったらどうだ？」

「そうですね。いつもこの姿だったから忘れていました」

クロノはユーノに何かを言つとユーノは思い出したように声を上げたと思えば光に包まれた。光が消えるとユーノはフレットではなく人間の姿をしていた。

「なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」

「え? ふえええええつ!!!」

「どうしたなのは、いきなり大きな声を出し…て？…誰だ！お前は…！？」

なのはの大きな叫び声にジャックは振り向くとそこには見知らぬ男の子が啞然とした顔で立っていた。

「え？あ、あの…なのはと初めて会った時って…この姿じゃ」

「ち、違うよ！ずっとフェレットだったよ…！」

「……………ああ！確かにそうだったね」

「まさか、お前…ユーノなのか？」

「ジャックさんにはこの姿は初めてで…会ってますよね？」

「何でそこで僕に振る」

こんなやり取りを数分してから落ち着いたところで目的の場所にクロノが案内した。

「艦長失礼します」

「ここは……本当に艦の中で合っているのか？」

ジャックの言い分も分かるだろう。確かに信じられないのは本当だ。なぜなら、自動ドアを開けると目の映った光景は……。

「ようこそみなさん。どうぞ、楽にして♪」

たくさんの盆栽に、茶を点てるための道具に赤い敷物に室内用にこしらえたと思われる獅子おどし……何処の和式だよと言いたくなる部屋であつた。

「し、失礼します!」

「邪魔をするぞ」

なのはとユーノは少し緊張気味だがジャックはそうでもなさそうだった。それらはお茶を飲み、お菓子を食べながら今までしてきたことやこれからの事を話あつていった。

「なるほど。そうですね。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね?」

「それで、僕が回収しようと……」

「立派だわ」

自分の責任だと感じ集めようとしたユーノにリンディはその心意気を評価した。

「だけど、同時に無謀でもある!」

「あの、ロストロギアって何なんですか?」

「俺もそれが気になっていた。そのジュエルシードと何か関係があるのか?」

その質問に少し困った顔をしたりリンディだったが、答えてくれた。

「ああ、異質世界の遺産、ていつてもわからないわね。ええと……次元空間の中にはいくつもの世界があるの」

予想以上にスケールの大きい話になってきたとなのはは思う。

「それぞれに生まれて育っていく世界、その中に極稀にだけど進化しすぎる世界があるの。技術や科学、進化しすぎたそれらはやがて自らの世界を滅ぼしてしまつて、その後に取り残された失われた世界の危険な技術の遺産」

「それが、ロストロギアだ」

ジャックはその話を若干信じていた。何せ自分のいた世界でゴドウィンが似たようなスケールの話をしていたからだ。実際起きたからこそあの時は信じた。今回もそんな感じだろう。

「さて、一通り説明した事だし、今度は君たちの事を説明して欲しいな。特に君だ」

「俺か？」

説明を終えるとジャックの方を見るクロノ。

「まず、一番気になるのが君の左腕に装備されているその機械についてだ」

「こいつはデュエルディスクと言うものだ」

「それじゃ、そのディスクに詰め込ませているカードの束は？」

「これはデュエルリストの魂！デツキだー！！」

それからはクロノとリンディ達が質問↓ジャックが答える↓ジャックが自分のデュエルタクティクスを見せ付ける↓なのは達が喜ぶのようになります。そしてその後はジャック達は一旦自分の家に帰り休むことに……。なのはは自分がする事を親…と言っても母である桃子に話す事にした。

くプレシア邸く

「スレイヤー…もう時間が少ない。だから貴方に力をあげるわ」

「はい。私はプレシア様の意のままに……」

「さあ…受け取りなさい。闇の力を……」

そしてスレイヤーはプレシアより強大な力を与えられた。しかし、その代償はかなり高い代償だった……そう…自分の命だ…。

第6話「捕まったジャック」（後書き）

次回予告

「貴様！今度こそ決着をつけてくれる！！」

「ふふ、今の私に勝てますかね？闇の力を手に入れた私に！！」

「なんだ！？このモンスターは！！」

「次回荒ぶる王者！魔法の世界で列を成す」

『闇の獣ダーク・ビースト』

ライディングデュエルアクセレーション！！」

第7話「闇の獣ダーク・ビースト」(前書き)

連投… やっぱりしてしまいました。

今回のスレイヤーのデッキは6割か7割ぐらいオリカです。

第7話「闇の獣ダーク・ビースト」

「このコーヒーも中々いい香りだな」

「あらあら、ジャックさんたら…砂糖とミルクは入れないの？」

「さすがにそんな大量には入れん」

今ジャックはアースラの食堂でリンディとクロノそしてオペレーターのエイミィと一緒に昼食を取っているところだ。なのはは学校があるためアースラにはいないが終わった合流するらしい。

そして、ジャックが言うそんな大量には入れんとは、リンディの飲んでいるお茶の事である。通常の2倍ぐらいの砂糖を入れ、ミルクを入れる。さすがにお茶をここまで甘くする人は見たことが無いとジャックはコーヒーを飲みながら常々思うようだ。

「さて、今日の君の任務だがいつも通り残りのジュエルシードを集めてもらう。いいな？」

「ふん。言われなくとも俺はそのつもりだ。残り6つなど余裕だな」

「まあ、今からではないから…時間になったら呼ぶ。しばらくは自由にしていってくれ」

クロノはある程度ジャックに説明して食堂を去って行った。

「相変わらずクロノ君はぶっきらぼうだねえ。もう少し素直になれば可愛げがあるのに」

「私もそう思っけど、クロノは自分の執務官として仕事をしての責務を果たしているのよ。だから、あんなふうになっちゃダメ。…休みが取れたら何処かへ旅行に行こうかしら？」

「あ！それ私も賛成です！！」

そんな女性の会話に耳を傾けずジャックはコーヒーを飲み続けていた。

く海鳴市 海上く

「ジュエルシードは海底？」

「うん。ここから魔力を送って引きずり出す」

「大丈夫なのかい？」

海上で静かに話す2人。フェイトは海底にあるジュエルシードを引きずり出すようだ。魔力を叩き込むらしい。

「やるよ、バルディッシュ」

『イエッサー』

（同時刻　アースラ艦内）

「あの子なんて無茶なことを…！」

「何とも呆れた無茶をする子だわ！」

艦内ではフェイトの無茶な行動に呆れながらも心配するリンディとエイミイがいた。

「無謀ですね。間違いなく自滅します。あれは個人が出せる魔力の限界を超えている！」

「おい！今フェイトは何をしようとしている！？」

「多分、魔力流を叩き込んで海中にあるジュエルシードを強制発動させて回収しようとしてるんだと思う」

ジャックの怒鳴りにエイミイは冷静に説明をする、なのははその事を聞き現場に向かおうとする。

「その必要はない。もうすぐ彼女は自滅する」

「何…！？」

「私達は常に最善の選択をしないといけないわ。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実よ」

クロノの言葉にジャックは何か心の底から怒りと同時に失うことへの悲しみがこみ上げてきた。そう、この悲しみは、あの時と似ている……カーリーを失った時と…。

「君たちは、何をしようとしている」

「ふん！知れたこと！！フェイトを助けに行くんだッ！！！」

「すみません！でも…私は…このままフェイトちゃんが傷つくところは見たくありません！！」

なのはとジャックは転送ポートからユーノの魔力でフェイトの結界内へと飛ばうとした。

「させるか！」

「《バトル・フェーダー》を特殊召喚！」

「何！？」

それを止めようとクロノは攻撃をする。しかし、ジャックのバトル・フェーダーの効果によりそれは阻まれた。その隙にジャック達はフェイトのいる場所へ転送した。

「よし！早くフェイトちゃんを…！」

「させませんよ…！」

海上に着くなりなのははフェイトを助けようと飛行魔法で移動しよ

うとした。しかし、何かの衝撃でなのは吹き飛ばされた。

「なのは！大丈夫か！？」

「は、はい。平気です」

「ふふ、貴方達にはここにいてもらいましょうか？」

「貴様は…スレイヤーッ！！」

そこにはプレシアの部下のスレイヤーだった。だが、空中にいる彼女はいつもと様子が違う。いつもとは違う殺気を発していた。

「くッ！なのは！コイツの相手は俺に任せろ！」

「で、でも！」

「早くフェイトを救うのだ！！お前の…お前の思いを全てぶつけてこい！！」

「！？…はい！！」

そしてフェイトの方へと飛んで行ったのは。そしてスレイヤーがそれを止めるかと思いきやジャックを見つめ動こうとしない。

「貴様…始めから俺が狙いだっただのか？」

「そうです。私の任務はジャック・アトラス、貴方を我が主の下へ連れて行くことですからね！！」

ディスクを展開しながら叫ぶスレイヤー。ジャックもそれに応戦すべくディスクを展開。

「貴様との因縁…ここで断つー!」

「それでは…」

「デュエル!!」

ジャックLP4000 手札5

スレイヤーLP4000 手札5

「私の先攻、ドロー! 私は《DB猛撃のレイレイ》ダイク・ビーストを攻撃表示で召喚!」

DB - 猛撃のレイレイ

功2300

フィールドにレイレイ? が現れた。しかし、なぜか黒い。

「このモンスターは…! ?」

「ふふ、これこそプレシア様から授かった闇の力!! その恐ろしさ思い知らなさい!! さらに永続魔法《猛獣の進撃》を発動! カードを2枚セットしてターンエンド! そしてこの瞬間! 永続魔法《猛獣の進撃》の効果発動! 自分のエンドフェイズ時、フィールドに存在する《獣族》《獣戦士族》モンスター1体に付き、貴方に200ポイントのダメージを与えます!」

「何！？ぐあああ！！」

ジャックLP4000↓3800

スレイヤーLP4000 手札2

場 DB - 猛撃のレイレイ 猛獣の進撃 伏せ×2

ジャックは薄い猛獣達によって跳ね飛ばされた。

「言わなくとも分かっていると思いますが、これはダメージが実体化しています」

「くそ！俺のターンッ！！俺は《ソウル・デーモン》を守備表示で召喚！」

ソウル・デーモン

守1300

「カードを3枚伏せターンエンド！！」

ジャックLP3800 手札2

場 ソウル・デーモン 伏せ×3

「私のターン！《DB - 剣閃のガルム》を攻撃表示で召喚！バトル！レイレイで《ソウル・デーモン》を攻撃！」

黒いレイレイによってソウル。デーモンは粉碎された。

「《ソウル・デーモン》の効果発動！このモンスターが戦闘によつ

て破壊された時、デッキよりレベル4以下の《デーモン》と名の付くモンスターを特殊召喚する！俺は《インターセプト・デーモン》を守備表示で召喚！」

インターセプト・デーモン
守1600

「さらにガルムで《インターセプト・デーモン》を攻撃！」

「この瞬間の効果発動！貴様に500ポイントのダメージを与える！」

スレイヤーLP4000↓3500

「うぐッ！」

ガルムの剣が届く前に効果ダメージを受けるスレイヤー

「さらに罠カード《闇の呪縛》！これで貴様のモンスターの攻撃力を700ポイント下げる！」

DBー剣閃のガルム
功1800↓1100

カードから出てきた鎖によってガルムは攻撃力がダウンした。

「これで俺のモンスターの守備力の方が上だ！」

スレイヤーLP3500↓3000

「うぐ！？ならターンエンドです。そしてこの瞬間《猛獣の進撃》の効果発動！」

ジャックLP3800↓3400

スレイヤーLP3000 手札2

場 DB - 猛撃のレイレイ DB - 剣閃のガラム 猛獣の進撃 伏せ×2

「俺のターンッ！！自分フィールドに悪魔族モンスターが存在する時、このモンスターは能力を無効にして特殊召喚できる！《スカーレット・デーモン》を特殊召喚！」

「来ましたね！この瞬間《神獣王の降誕》を発動！現れなさい！」

そこには巨大な…獣の王が現れた。ジャックはその圧倒的な力に少しばかり冷や汗が出ていた。このモンスターはいったい何なのか？

第7話「闇の獣ダーク・ビースト」（後書き）

次回予告

「これこそ！私の切り札！！」

「コイツは！！？」

「私は負けるわけには行かないのです！！」

「負けん！俺は負けんぞ！！！！俺の荒ぶる魂よ！！！！今こそ！その力を具現化せよ！！」

「次回荒ぶる王者！魔法の世界で列を成す！

『闇を焼き尽くす紅蓮の竜 スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』

ライディングデュエルアクセラレーション！！」

第8話「闇を焼き尽くす紅蓮の竜 スカーレット・ノヴァ・ドラゴン」(前書き

今回はタイトル通りバーニング・ソウルが発動します。

ごゆっくりしてってください。

第8話「闇を焼き尽くす紅蓮の竜 スカーレット・ノヴァ・ドラゴン」

「これこそ私の切り札！！《神獣帝王ダーク・バルバロス》！！」

神獣帝王ダーク・バルバロス

功4000

「攻撃力4000！？」

「フィールドに《DB》が2体以上存在し相手がモンスターを特殊召喚した時発動。デッキ・手札からダーク・バルバロスは特殊召喚できます。そしてこれにより効果を発動！消え去りなさい！！シャドウ・インフィニティツ！！」

ダーク・バルバロスは槍を高速で回し始める。すると、周りが深い闇に包まれた。

「モンスターが、闇に吸い込まれていく?!」

「ふふ、効果によりこのモンスター以外のモンスターを全て破壊します。これで貴方の場はがら空き…っと！そういえば貴方はまだ通常召喚が残されていましたね」

「（攻撃力4000…俺の手札に奴を倒せるカードは無い。ここは耐え凌ぐしかない…か）俺は《ダブル・プロテクター》を守備表示で召喚。カードを1枚伏せターンエンド」

ダブル・プロテクター

守1600

ジャックLP3800 手札0
場 ダブル・プロテクター 伏せ×3

「私のターンです。ドロー！良い事教えて差し上げます。《神獣帝王ダーク・バルバロス》は貫通効果を持っております！並大抵の守備力ではかかりませんよ！！《DB-紅空のサイズ》を召喚！バトルです。ダーク・バルバロスで攻撃！ダーク・トルネード・シェイパーッ！！」

「ぐあああッ！！」

ジャックLP3800 ↓ 1400

「ぐうッ！《ダブル・プロテクター》の効果で貴様のモンスターの攻撃力を半分にする！」

DB-紅空のサイズ
功1800 ↓ 900

「そして罠カード！《ダメージ・リゾネーター》！自分がダメージを受けた時発動！受けたダメージ以下の攻撃力を持つ《リゾネーター》と名の付くカードをデッキから2体特殊召喚！俺は《クロック・リゾネーター》と《バリア・リゾネーター》を守備表示で特殊召喚！！」

クロック・リゾネーター
守600

バリア・リゾネーター

守800

2つのカプセルから2体のリゾネーターが守備で特殊召喚された。

「《DB・紅空のサイズ》で攻撃!!」

サイズの真紅に輝く鎌がバリア・リゾネーターを切り裂く。

「サイズが守備モンスターを破壊した時、貴方のデッキのトップから1枚墓地に送ります」

「（《ダーク・リゾネーター》が…!!）」

「私はこれでターンエンド、これで貴方のモンスターの効果も消える。そして永続魔法《猛獣の進撃》の効果で貴方にダメージを与えます!!」

DB・紅空のサイズ

功900↓1800

ジャックLP1400↓1000

スレイヤーLP3000 手札2

場 神獣帝王ダーク・バルバロス DB・紅空のサイズ 伏せ×2

「俺のターンッ!!《マッド・デーモン》を召喚!!レベル4《マッド・デーモン》にレベル3の《クロック・リゾネーター》をチューニング! 天頂に輝く死の星よ!地上に舞い降り生者を裁け!シンクロ召喚!降臨せよ!!《天刑王 ブラック・ハイランダー》!!」

天刑王 ブラック・ハイランダー
功2800

フィールドに黒い鎌を持った死神が光臨した。

「このモンスターは私のデータにはありませんね」

「行くぞ！ブラック・ハイランダーで《DB - 紅空のサイズ》を攻
デス・ボラ・スレイ
撃！死兆星斬！！」

スレイヤーLP3000↓2000

「畏発動！《リビングデットの呼び声》！先ほど破壊されたサイズ
を特殊召喚！」

DB - 紅空のサイズ
功1800

ジャックは新たなモンスターでスレイヤーのモンスターを破壊しダ
メージも与えた。しかし、蘇生カードによりスレイヤーのモンス
ターは復活した。

「ターンエンドだ！」

ジャックLP1000 手札0

場 天刑王 ブラック・ハイランダー 伏せ×2

「私のターン！畏発動！《ブラック・ロスト》！自分フィールドの
《DB》の数だけ貴方のモンスターをエンドフェイズまで除外しま
す！」

ブラック・ハイランダーが闇に飲み込まれ目の前から姿を消した。

「これでがら空き、これで私の勝ちですッ！！！」

「させるかッ！！罫カード《スクリーン・オブ・レッド》！コイツがある限り貴様は攻撃はできん！」

「おや、残念。なら、私はターンエンドです。ふふ、さあ…もうすぐ…もうすぐです！私は自分の使命を果たせる！！アハハハハッ！！！」

スレイヤーは突然高笑いをした。ジャックは気でも狂ったか？とスレイヤーを見つめる。

「貴様！何を勝手に勝ち誇っているんだ！俺のライフはまだ尽きてはいないぞ！！！」

「ん？それももうすぐ尽きますよ。《猛獣の進撃》の効果発動！」

ジャックLP1000↓600

「この通り貴方のライフは風前の灯！次のターンで終焉です」

「貴様ッ！！俺をなめるなッ！！！」

「おお、怖い怖い」

スレイヤーLP2000 手札3

場 神獣帝王ダーク・バルバロス DB - 紅空のサイズ 伏せ×0

完璧に自分の勝利が確定していることが決まっているかのように高笑いするスレイヤー。そんな彼女を姿を見て、その言葉を聞いて、ジャックの魂の火がついた。

「なめるなッ！！だったらいいだろう。今の俺のターンで貴様を倒すッ！！貴様の罠の効果によりブラック・ハイランダーは戻ってくる！そして、俺のターンッ！！！」

ジャックの腕の痣が輝く。そしてそれと同時に手が燃え出す。

「俺は《レッド・ノヴァ》を召喚！レベル7《天刑王》ブラック・ハイランダー》にレベル1の《レッド・ノヴァ》をチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！！我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン

功3000

「今更攻撃力3000のモンスターで何をしようと言つのですか？」

「こうするんだ！スカーレット・カーベット罠発動！自分フィールド上にドラゴン族のシンクロモンスターが表側表示で存在する場合、自分の墓地に存在する《リゾネーター》と名のついたモンスターを2体まで選択して特殊召喚する！来い！《ダーク・リゾネーター》《バリア・リゾネーター》！！」

レッド・デーモンズの目の前に炎の柱が2本出る。そこからは2体のリゾネーターが復活していた。

「荒ぶる！荒ぶるぞッ！！俺の魂が貴様を倒せと燃え滾っているぞッ！！」

「こ、この力は？！」

ジャックの眼が赤くなっていた。充血ではない。ジャックの力『燃え滾る魂』が發動しているのだ。

「レベル8《レッド・デーモンズ・ドラゴン》にレベル1《バリア・リゾネーター》とレベル3の《ダーク・リゾネーター》をダブルチユーニングッ！！王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよッ！！！」

2体のリゾネーターが通常とは違う炎の輪となりレッド・デーモンズを包み込む。そして、炎がもっているジャックに手よりカードが出現した。

「シンクロ召喚！いでよ！《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》！！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン

功3500

「これが…主が欲している力…！（この力は……危険だ！常人が扱える代物じゃない！！プレシア様なら…大丈夫でしょうが……）」

スレイヤーは目の前にいる紅蓮の悪魔龍に恐れをなしている。その力は自分の知っている力より遥かに超えている。こんな力主人であるプレシアは扱えるのか？と心配をする。

「《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》の攻撃力は墓地に存在するチューナー1体につき500ポイントアップする。俺の墓地にはチューナーが4体！よって攻撃力は2000ポイントアップする！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン

功3500↓5500

「（ふふ、これで私の『本当に使命』が果たせます。さて、最後まで演技をしますか。ばれないように）私は負けるわけには行かないのです！！ここで…負けるわけには…！」

「ふん！その気持ちは俺も同じだ！負けん！俺は負けんぞ！！俺の荒ぶる魂よ！！今こそ！その力を具現化せよ！！！」

スレイヤーは最後何かを考えていたが、すぐにジャックを睨みつけ負けるわけにはいかないと強く叫ぶ。だが、ジャックもその気持ちは同じここで負けるわけにはいかない。遊星と勝負をするまで…ここにいるフェイトを助けるまでは…！

その思いがスカーレット・ノヴァ・ドラゴンに届いたのか、見る見るうちに炎が身に纏い威圧感が増していく。紅蓮の悪魔がジャックに力を……。

「これで終了だ！《DB・紅空のサイズ》に攻撃！バーニング・ソウルツ……！」

スレイヤーLP2000↓0

「ぐうう！やりますね。完敗です」

「貴様…」

スレイヤーは負けたのに清々しい顔をしていた。ジャックはそんな彼女を見てまさかと言葉を発しようと刹那…！

「アハハ」使えない人形は…処分しなくちゃねッ！」

「なッ！？ああああああッ！！！」

「スレイヤーッ！？」

何処からか楽しそうに遊ぶ子供の声がしたと思えば黄色い魔力の槍がスレイヤーの体を貫いていた。ジャックはその場に倒れそうになるスレイヤーに駆け寄ろうとしたが、彼女の声にその足は止まった。

「ジャック・アトラス！こっちに来てはいけません！」

「し、しかしッ！」

「これを受け取って来ださいッ！！」

体に走る激痛に耐えながらスレイヤーはジャックが来るのを叫び止める。ジャックはその言葉を聞くも足が勝手に進もうとする。失うことへの恐怖なのだろう。

そしてスレイヤーはジャックに小さなケース（カードが入るぐらい）を投げる。ジャックはそれを受け取り確認したが何かは分からない。確認していた隙に見えない敵はスレイヤーに攻撃をした。

「ああ！失敗しちゃったかあ……まあいいや」とりあえずあんたは……消えちゃえッ……！」

「ジャック・アトラス……フェイト様を……」

「す、スレイヤーッ……！」

スレイヤーは光に包まれる。その中でスレイヤーは優しい笑顔でフェイトを救って欲しいと最後の願いを言おうとしたのだろう。しかし、言い終わる前に……姿を消した。ジャックはその場に崩れ落ちる。

「くそッ！くそッ！俺は……俺は……何も……救えないのか……！」

「アハハ」やった」」やつと消えてくれたよお」」

「ッ！何処だッ……！いったい何処に隠れているッ……！」

さつきから見えない敵がスレイヤーを消して笑っていることにジャックは怒る。そして、怒気にこもった声で敵に何処にいるか叫ぶ。

「もう……！そんな大声出さなくても……ここにいるよ」」

「！き、貴様は……フェイト……ト？」

空を見上げるとそこにはフェイトが……2人いた。初めは目を疑った。しかし、確かに自分の目の映っているのはフェイトだ。

違うところといったら、笑い転げているフェイトは白いフリルの服を着て髪は下ろしている。その姿はまるで人形のようなだった。もう

片方はいつもの漆黒のバリアジャケットを装備しているが…ボロボロで意識を失っている。

「ええ！私はフェイトじゃないよ！私はアリス……まあ…フェイトと言ったらフェイトだけど」

「ジャックさん！す、すみません！フェイトちゃんが」

「なのは！……そうか。奴に奪われたと言う事が」

アリスと名乗る少女は意味の分からない言葉を言う。そんな中、なのはがジャックの下に戻ってくる。なのはは申し訳なさそうにジャックに頭を下げる。

ジャックはその言葉と表情で理解した。あのアリスと言う名の少女にフェイトを奪われたと言う事が……。ジャックはそうとわかりアリスを睨む。

「そんなに睨まないでよ」今日はフェイトの確保と裏切り者の処分だけ！…貴方達とはまた後でね」

「な！貴様！待てッ！！」

「フェイトちゃんッ！！」

アリスはそう言い残し転移魔法で何処かへとフェイトと一緒に消えて行った。ジャックは結局フェイトを救えなかったことに悔やむ。なのはも同様だ。そんな2人に近づく人影があった。

「2人ともちよっといいかい？」

「貴方は…アルフさん？」

近づいてきた人影はフェイトの使い魔アルフだった。アルフは悲しい顔で2人に声をかける。いったい、何を話そうというのか？

第8話「闇を焼き尽くす紅蓮の竜 スカーレット・ノヴァ・ドラゴン」(後書き)

次回予告

「新たな敵アリス…フェイトと同じ顔をしていた奴はいつたい？そんな中大魔導師プレシア・テストロッサが動きを見せる

次回荒ぶる王者！魔法の世界で列を成す！

『進撃！大魔導師プレシア・テストロッサ』

ライディングデュエルアクセラレーション！！」

第9話「進撃！大魔導師プレシア・テストロッサ」（前書き）

今回はプレシアが進撃をしてきます！物語も終盤に近づいてきました！

楽しみに！！

第9話「進撃！大魔導師プレシア・テストロッサ」

「まず君に聞きたいことは、ジュエルシードを集めて何をしようとしていたかだ」

「その事はあたしも知らない。ただプレシアがフェイトに必要なから集めるようにと言われたから集めていただけさ」

その後アルフは管理局に身柄を拘束された。今はクロノが尋問しているところだ。

「じゃあ、質問を変える。あの白い少女はなんだ？フェイトに似ていたが」

「それも分からない。あんな子今まで見たことも無かったから……」

「……ふう。どうやら本当に何も知らないようだな」

アルフの表情を見てクロノは尋問をやめた。これ以上質問をしても同じ答えが返ってくると判断したからだ。

「それじゃ、これで終りだ。今日は部屋に戻っていてくれ。それと君たちは自分の家に帰るんだ」

「あ、あの！フェイトちゃんは……」

「俺も気になる。フェイトは……フェイトの行方は分かったのか？」

「……ああ。もう調べはついている」

その言葉を聞いて2人は身を乗り出した。

「だったら、私たちも！」

「残念だが、もう敵のアジトである『時の庭園』には僕が手配した部隊が突撃したところだ」

そう言ってクロノはモニターを操作してその様子の映像を映した。

『目標を発見！』

「どうやらもう発見したようだな」

『プレシア・テストロッサ！時空管理局法違反及び管理局制の攻撃で貴女を逮捕します！！』

しかし、プレシアは余裕の顔で座っていた。武装局員は不気味に思う。すると彼らの目の前に少女が現れる。アリスだ。アリスがおもちゃを見つけたかのようにニコニコ笑っている。

『な〜に？お兄さん達プレシア様を捕まえに来たの？アハハハッバツカじゃないのッ』

『何がおかしい！！』

『だってさあ…あんた達は私の手のよって死んじゃうんだからねッ！！』

武装局員が不気味に思いアリスに攻撃した。しかしアリスは黄色い

魔力の糸を指から大量に出し局員を攻撃してくる。そして、そこで通信は切れて映像を見ていたクロノ達は沈黙する。

「あれが君の言っていたアリスか？確かにフェイトそっくりだが…」

「あんなの…フェイトじゃない!!」

「確かに見た目はフェイトそっくりだが…性格は正反対か…いや、あれは殺人を楽しむ悪人そのものだ!!」

「あんなのフェイトちゃんはず無い!!」

それぞれ先ほどの映像を見て思った事を言う。そして、そんな空気の中モニターにプレシアが映った。

『ふう… たった9個じゃアルハザードへ辿り着けるかどうかかわからないけど… でもいいわ。全てを終わらせる。アリスアを亡くしてからの暗鬱な時間… 身代わりの人形を娘扱いするのも疲れたわ』

「あれは…フェイトがもう1人？いや、少し幼いか？」

「どう言う事？あのカプセルに入っている子は… そういえばさっきアリスアって言ってたけど」

プレシアはカプセルに入った少女を見つめながら縛られているフェイトに言い聞かせる。ジャック達はカプセルに入っている少女を見つめる。

『聞いている？貴女のことよ、フェイト』

『か、母さん？』

『折角：アリシアの記憶をあげたのにそっくりなのは見た目だけ。役立たずでちつとも役に立たないお人形…』

プレシアの言葉にモニターを見ていた者達は開いた口が塞がらない。ジャックは両拳をギュツと思い切り握りしめていた。

「最初の事故の時、プレシアは実の娘アリシア・テストロッサを亡くしているの。彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる、使い魔を超える人造生命の生成…」

「あのカプセルに入っているのがアリシアか」

「そして、死者蘇生の秘術。フェイトって名前は当時、彼女の研究でつけられた開発コードなの」

『あら、よく調べたわね。そうよその通り。だけど、ダメね。ちつとも上手くいかなかった。作り物の命は所詮作り物。失った者の代わりにはならないわ』

「（なん……だとッ！！）」

エイミイの言葉にプレシアは語り始める。近くで聞いていたフェイトは目を見開いてガクガクと震えている。ジャックはプレシアの言葉を聞くことに怒りがこみ上げていく。

『アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々ワガママも言ったけど、私の言う事をとてよく聞いてくれた……』

「……る」

『アリシアはいつでも私に優しかった…』

「……める」

『フェイト、やっぱり貴女はアリシアの偽者。せつかくあげたアリシアの記憶も貴女じゃダメだった』

「やめろおツ！…！」

フェイトに言葉の剣が突き刺さることにジャックの怒りは頂点まで達しついにモニターのプレシアに叫ぶ。

『アリシアを蘇らせるまでの間に、慰みに使ったためのお人形。だから貴女はもういないわ。どこへなりと消えなさい…！』

「！？」

「貴様ツ！！いい加減にしろツ！！生まれがどうあれ、フェイトは貴様の娘だ！実の娘をそこまで罵倒してなにが楽しいツ！！！」

『……ジャック・アトラス。あなたはここに来なさい。あなたのシグナーの力、そして紅蓮の悪魔の力…それが必要なのよ。フェイトを助けたければ…あなたの力を全て私の捧げるのよ…！』

言葉の剣がフェイトの心を完璧に貫いた。フェイトは意識を失ってしまった。ジャックはプレシアに叫ぶ。しかし、彼女は聞き耳持たず言葉を続ける。

「俺の力だと！？……いいだろう！」

「ジャックさん！？」

「だがッ！俺にデュエルで勝つたらの話だ！スレイヤーにデュエルモンスターズをやったのは貴様だろう！ならば貴様も持っているはずだ！」

『……いいわよ。だけど、あなたがそのつもりなら私にも考えがあるわ！さあ！ここまで……辿り着けるかしらッ！……！』

「ふん！いいだろうッ！このジャック・アトラス、フェイトを助けるため貴様を絶対倒してみせるッ！……！」

プレシアはジャックの言葉を残し通信を切った。ジャックは通信が切れると同時にズカズカと歩き出す。

「おい！まさか本当に1人で行くか！？」

「当たり前だ！俺は1度決めたことは決して曲げん！！おい！そこにお前！」

「は、はい」

ジャックはクロノの言葉を強引にかわし、近くにいる局員に叫ぶ。

「俺を奴のところまで転送しろ！！」

「え、えっと……」

「少し落ち着きなさい。ジャックさん」

困る局員に怒鳴り迫るジャック。そこに艦長であるリンディが現れる。

「1人では危険よ」

「俺は1人でも大丈夫だッ!!」

「駄目よ。いくらあなた自身が大丈夫だと言っても私達はあなたを危険な所に1人で行かせるわけにはいきません」

「その通りですよ!ジャックさん!!」

「なのは?」

1人でも行けると言い言う事聞かないジャック。リンディはそれでも引かず言葉を続ける。なのは達もそれに反応する。

「私も一緒にフェイトちゃんを助けに行きます!私も…フェイトちゃんに心配なんです!!」

「あたしも行くよ!フェイトはあたしの主なんだからね!」

「僕も行きます!ジャックさんを巻き込んでここまで大きくしたのは僕の責任です。だから、僕も行かせてください!!」

「ふう…仕方がないな。僕も行かせてもらうが、準備が必要だ。後で行くが君の目的通りフェイトを助けることにするよ」

「お前等…」

なのは、アルフ、ユーノ、クロノそしてエイミィやリンディもフェイトを助きたい気持ちは同じだった。ジャックはそんな仲間にチーム5D'sのメンバーのことを思い出した。

「（ふっ……どこの世界も…仲間というのは…いいものだな）いいだろう！俺たちでフェイトを救ってやろうではないか！！」

『おお！！』

こうして、ジャック達はフェイトを救うべく時の庭園に突撃することになった。しかし、ジャック達は知らなかった…闘うべき相手がプレシアだけではなく…衝撃な人物であることを……。

第9話「進撃！大魔導師プレシア・テストロッサ」（後書き）

次回予告

「フェイトを助けるべく時の庭園に向かった俺たちしかし、転移し目の前いたのは……フェイト？どう言う事だ！！どうしてフェイトがッ！！」

次回荒ぶる王者！魔法の世界で列を成す！

「救え！これが希望の光！」

ライディングデュエルアクセレーション！！」

第10話「救え！これが希望の光！」（前書き）

執筆しているうちに…自分で心配になってきました…。

第10話「救え！これが希望の光！」

「よし！早速プレシアの下に向かうぞ！！」

『おおお！！』

時の庭園に転移したジャック達。早速プレシアの下に行くべく走ろうとする。

しかし、楽しげな声に足が止まった。

「アハハ」行かせないよお！」

「この声は…アリスッ！！」

そうフェイトと同じ顔をしているが残酷な心を持っている白い人形アリスだ。

「ここをく通りたければあ…コイツを倒してからにしなよ」

「な！？お、お前は…フェイト？何故フェイトがッ！！」

「……………」

しかし返事が無い。よく見れば目に光が無い。まるで操り人形のような感じになっていた。

「アハハ」その人形にいくら話しかけても無駄だよ！ソイツはいまや私の操り人形なんだから」

「何ッ!？」

「う、嘘だよね!フェイトちゃんッ!!!」

「……………」

「だからあ無駄だつて言っているでしょ!さあ…構えなさい!ジャック・アトラスッ!」

アリスは糸でフェイトを操りなぜか腕に付いているディスクを構えた。

「フェイトとデュエルをしろと言うのか!そんな事できるはずが無い!!!」

「あれ?いいのかなああなたがフェイトに勝たないと先には進めないし…フェイトも正気には戻らないよ」

「そ、そんな!フェイトちゃんを倒さないと正気には戻らないって…」

「それじゃあ、ジャックさんがフェイトを傷つけることに!」

アリスの言葉になのはとユーノが悲しみの声を上げる。ジャックは…やはりまだ構えていない。

「ほらほら、早く構えなさいよ!来ないのなら…こつするまでッ!」

「フェイトッ!!!」

アリスはいくら待っても構えないジャックに痺れを切らしてフェイトに電撃を浴びさせる。しかし、フェイトは何も感じてはいないようだ。アルフはその飛び出す、しかし周りから人形が出てきて阻止された。

「くッ！この！邪魔をするなッ！！」

「アハハハ、私が何も用意してないとも思った？あんた達が送った局員達もちゃ〜んとお人形として私の手取り足取り動くようにしといたのよッ！さあ、これで残された道はフェイトとデュエルをして勝つことしかなくなっただよ？」

「……………いいだろうッ！！そのデュエル…受けてたっ！！」

「ジャックさん…！」

「心配するな。フェイトは傷つけたりはしない」

なのはは人形として自分達を攻撃してくる局員達を相手にしながらジャックの方を振り向く。

ジャックはなのはの言う事が分かっているらしくフツと微笑み歩き出す。

「やっとその気になったかあ。それじゃ！デュエル開始！！」

「行くぞ！デュエル！！」

フェイト（アリス）LP4000 手札5

「私から行くよ？ドロー」

フェイトは声が出せない。変わりに操っているアリスが指示をしている。

「早速出たね」魔法カード《デス・メテオ》」

「な！？それは禁止カードではないか！！」

「へ？ぷぷ…アハハ」ばつかじやないの？この世界はあんたの世界と違うんだよ？禁止なんて関係ないよ」とにかく…1000ポイントのダメージを食らいなさいッ！！」

「ぐあああ！！」

ジャックLP4000↓3000

虚空から巨大な隕石がジャックに直撃。ジャックは吹き飛ばされる。

「あれあれ？たった1000ポイントでそこまで飛ばされてちゃこの後のダメージはどうなるのかなあ？試してみよつと」魔法カード《昼夜の大火事》！相手に800ポイントのダメージ」

「ぐうッ！」

ジャックLP3000↓2200

倒れているジャックに追い討ちをかけるように床から炎がジャック

を燃やす。

「ふーん、これはいまいちかあったらカードを2枚伏せてターンエンド♪」

フェイト（アリス）LP4000 手札2
場 伏せ×2

「お、俺のターンッ！（くそッ！相手は禁止ありのバーンデッキ…
…それに俺が攻撃すればフェイトが傷つく…どうすれば…！）…《
ランサー・デーモン》を攻撃表示で召喚！」

ランサー・デーモン
功1600 星4

「あれ？フェイトを傷つけないって言っていたのに傷つけちゃうの？
…うわぁ残酷だねえ♪」

「ッ！カードを1枚伏せターンエンド…！」

ジャックLP2200 手札4
場 ランサー・デーモン 伏せ×1

「私のターン♪魔法カード《ファイヤー・ボール》！500ポイントのダメージを食らえ…！」

「ぐお…！」

ジャック2200↓1700

「さらにもう1枚♪」
ファイヤー・ボール

ジャックLP1700↓1200

容赦なくジャックに炎の球が体を燃やす。ジャックは耐えるしかなかった。

相変わらずアリスは相手を傷つけるのが楽しいと言いたげな笑顔だった。

「ターンエンドだよ？どうしたの？もう死んじゃった？」

フェイト（アリス）LP4000 手札1
場 伏せ×2

「ジャックさん！大丈夫ですか？」

「た、大変だ！今すぐ回復魔法を…！」

「や、やめろ…！」

人形となった局員の相手が終わったのかなのはとユーノは倒れたジャックに駆け寄る。

ユーノはジャックの姿を見て回復魔法をかけようとするが、ジャックは腕を掴みとめた。

「でも！でも！このままじゃ、ジャックさんが…！」

「大丈夫だ。心配するな！俺はこの程度では死なん…！それより、なのはとユーノ頼みがある」

「な、何ですか？」

ジャックは何事も無かったように立つ。そしてなのはとユーノに小さい声で頼みごとを言う。

「できるか？」

「任せてください！フェイトちゃんのためだったら私…頑張ります！！」

「僕も…そういうことだったら得意ですから！！」

「それでは頼んだぞ！！」

「はいッ！！」

するとなのはとユーノはジャックの後ろに移動する。ジャックはアリスの方を睨む。

「もうお話は終わった？だったら早く来なよ！！」

「言われなくとも！俺のターンッ！俺は《バリア・リゾネーター》墓地に送り《パワー・ジャイアント》を特殊召喚！このモンスターは墓地に送ったモンスターのレベル分自分のレベルを下げる！」

パワー・ジャイアント

功2200 星6 ↓5

「そしてこのモンスターがいる限り俺は効果によるダメージは受けない！」

「マジッ！？うわー！やばいよう！……！とでも言うと思った？罨カード《奈落の落とし穴》！《パワー・ジャイアント》を破壊して除外だよ！！」

パワー・ジャイアントは足元からでた穴に落ちていった。

「まだだ！《パワー・サプライヤー》を守備表示で召喚！そして効果発動！１ターンに１度自分のモンスターの攻撃力を４００ポイントアップさせる！」

パワー・サプライヤー
功４００ 星２

ランサー・デーモン
功１６００ ↓ ２０００

「バトル！《ランサー・デーモン》で攻撃！！」

「え？マジ！やっぱり残酷だねえ」

「ふん！お前の思い通りにいくと思うな！！」

ランサー・デーモンがフェイトに槍が届く前に防壁が張られその攻撃を防ぐ。

フェイトLP４０００ ↓ ２０００

「な、何！？この防壁は！！」

「フェイトちゃんは…私達を守るッ!!!」

防壁を張ったのはなのはとユーノだった。どうやらジャックはなのは達に自分の攻撃を防ぐように言っていたようだ。

「これで安全に貴様を倒せると言う事だ!! 覚悟しろ! カードを1枚伏せターンエンド!」

ジャックLP1200 手札1

場 ランサー・デーモン パワー・サプライヤー 伏せ×2

「ぐぬぬ! もう! ウザいなあ! だったらこれだったらどう! 私は魔法カード《火炎地獄》を発動! 相手に1000ポイントのダメージを与え!」

ジャックLP1200 ↓ 200

「くそッ!!!」

「さ・ら・に! 自分に500ポイントのダメージを与える!」

「何ッ!?!」

フェイトLP2000 ↓ 1500

ジャックに容赦なく激しい炎が体を焼く。アリスはそれだけではなくフェイト自身にも炎を浴びさせた。フェイトは声も上げず炎に焼かれるだけだった。

「フェイトちゃん!」

「貴様ッ!!」

「カード伏せてターンエンド。さあ！早くしないとフェイトが傷ついていくよ？どうするの？」

フェイト（アリス）LP1500 手札0

場 伏せ×2

「（俺は…俺は…どうすれば…!）」

ジャックのライフはあと200、そしてフェイトをに攻撃をすればアリスが自らの手で傷つける。

どうすれば？と拳を強く握り締めていると、デッキのトップが光だした。

「こ、これは!？」

「な、何ッ!？」

「このカードは……ッ！（分かるぞ！このカードこそ…希望の光!）俺の…ターニンッ……!」

ジャックはカードに指を置く。すると、暖かな光がジャックを包み込む。

ジャックは、思い出した。スレイヤーから受け取ったカードの事を……。

「俺は《フォース・リゾネーター》を召喚!」

フォース・リゾネーター

功500 星2

「行くぞ！レベル4《ランサー・デーモン》とレベル2《パワー・サプライヤー》にレベル2《フォース・リゾネーター》をチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂！！！」
レッド・デーモンズ・ドラゴン

レッド・デーモンズ・ドラゴン

功3000 星8

「アハハ」今更そんなモンスター出してどうするの？言っておくけど私の伏せカードはあんたの攻撃を防ぐためのカードよ！」

「フツ…その言葉を聞いて安心して…貴様を倒せる！！リバーサイドオープン！《スカーレッド・カーペット》！墓地より《フォース・リゾネーター》《バリア・リゾネーター》を特殊召喚！そして自分のフィールドの魔法・罫カードを1枚墓地に送りこのモンスターを特殊召喚！来い！《レイジングハード・リゾネーター》！！！」

フィールドになのはの愛機レイジングハートを持ったりリゾネーターがカードを破壊して現れる。

「あれってレイジングハート！？」

「私のもう一機？」

「レベル8《レッド・デーモンズ・ドラゴン》にレベル1《バリア・リゾネーター》と《レイジングハート・リゾネーター》をダブルチューニング！！！」

レイジングハート・リゾネーターとバリア・リゾネーターが複数の星の輪となりレッド・デーモンズ・ドラゴンを包む。

「王者と星光、今ここに交わる。希望の力よ、光明たる翼で羽ばたけ！シンクロ召喚！我が光！！」
スターライト・デモン・ドラゴン

スターライト・デモン・ドラゴン

功3500 星10

「このモンスターは…何！？こんなの知らないッ！！」

「綺麗……」

その姿はまさしく星光と言ってもいいほどの美しさだった。体は真紅の輝き、腕には桃色に少し赤が混ざったような光の翼が4枚、背中にはその光の翼が6枚付いていた。

「そして《レイジングハート・リゾネーター》の効果発動！このモンスターをシンクロ召喚に使用した時、シンクロ召喚したモンスターのレベル×100ポイントライフを回復する！」

ジャックLP200↓1200

「やった！ジャックさんのライフが回復した！！」

「これでしばらくは大丈夫なんだよね？」

ジャックのライフが回復して安心するのは。ユーノは少し心配している。

「このモンスターの攻撃力は相手の墓地に存在している魔法カード1枚につき500ポイントアップする！」

「え？相手墓地の…魔法？…やばッ！私の墓地に魔法カードは…」

「貴様の墓地に魔法カードは5枚！よって攻撃力は2500ポイントアップ…！」

スターライト・デモン・ドラゴン
功3500↓6000

「こ、攻撃力6000！？…で、でも！そんな攻撃したらフェイトもひとたまりもないわよ！？どうするのかなぁ？」

スターライト・デモン・ドラゴンは自らの翼を大きく広げる。アリスはその攻撃力に若干焦り気味になる。ジャックはフツと笑う。

「《スターライト・デモン・ドラゴン》の最終効果発動！ライフを800ポイント払うことで貴様の魔法・罠ゾーンのカードを全て破壊する…！」

ジャックLP1200↓400

「なのは！お前の技でフェイトをもつ1度救え…！」

「え？わ、技って？」

「お前がフェイトとの戦いで使った…星の輝きだ」

「あっ！」

ライフをコストにスターライト・デモン・ドラゴンの口元に巨大な魔方阵が展開した。

そして。なのははジャックが何を言っているのか分からなかったが、次の言葉で思い出した。

「フェイトとの対戦」

『受けてみて、デイバインバスターのバリエーション！』

『うう…ッ！ば、バインド！？』

『これが私の全力全開！スターライトオオブレイカーッ！！！』

『…………ッ！！』

この星光でフェイトを倒し…少しだが…彼女の心の扉を開けた…。

「あの技……うん！やってみます！！」

「ならば…我がモンスターと1つになり撃ち放つのだ！希望の光をッ！！」

「はい！！」

そしてジャックのシグナーの痣が輝く。するとなのはが光の粒子となってスターライト・デモン・ドラゴンと1つになる。

『…行くよ！もう1度…フェイトちゃんの心の扉を開いてみせる！』

「全力！全開！スターライトオオブレイカーッ！！！」

「ちょッ！そんな馬鹿魔力あり！？つてきやあああッ！！！」

桃色の魔力瞬速砲撃がフェイトの後ろのいたアリスも巻き込む。

「……この光……あの子は……ジャック？……私は……」

「フェイトちゃあぁんッ！！！」

「ッ！！私はッ！！」

砲撃が終わるとアリスは目を回し倒れておりなのはは一体化が解けていた。フェイトは……。

「いったく……あれ？ここは？……私はいったい？」

「フェイトッ！！！」

「わっ！あ、アルフ？どうして泣いているの？」

「フッ、お前が正氣に戻ったからに決まっているだろう」

「ジャック？」

フェイトは正氣に戻っていた。何が起ったか分からずキョトンとしているとアルフが勢いよく泣きながら抱きついてきた。慌てるフェイト。ジャックはそんなフェイトを見て一安心した。

「これで、終わりですか？」

「ああ。あとは、親玉を倒せば全て解決だ。…その前に」

「この子どうしましょう？…バインドをかけて撃ちましょうか？」

なのははふふと不気味な笑みでレイジングハートをアリスに向ける。

「……それはやめておいたほうがいいだろう。しかし、バインドをかけるのはOKだろう」

「はい」

結局バインドをかけてクロノ達が来るまで放置していようと言う事になった。皆が去った後にジャックはアリスの頭に何か置いていたようだが…それは何かは分からない。

一方プレシアはと言うと……ジャック達のデュエルを観戦していたようだった。

「アリスはやられたようね。しかし…あのカード…ふふ…スレイヤーやってくれるわね。だけど…そんなもじゃ…私は倒せないわよ？そう…我には…《地縛神》にはね！ふふ…アハハハハッ！」

誰もいない広い部屋に響き渡る声は人間のものではなかった。まる

で…化け物のような叫び笑いだった。その笑い声に答えるようにハチドリの痣が不気味に輝く……。

第10話「救え！これが希望の光！」（後書き）

次回予告

「ついに…貴様とのデュエルだ…！」

「さあ！来なさい…！！」

「何故…俺のD・ホイールが…それに貴様のその痣はッ…！」

「次回荒ぶる王者…魔法の世界で列を成す」

『決戦！地縛神再び…！』

ライディングデュエルアクセラレーション…！」

どうも。作者です。なんか勝手にデュエルを終わらせてすみません。それと今回出たオリカですが…どうですか？強すぎですかね？とにかく！何か感想や指摘、オリカ提供がありましたら宜しく願います…！それでは次回まで…！！

第11話「決戦！地縛神！」（前書き）

なんか…最近…誤字脱字が多い漆黒のカリスマですorz

デュエルはライディングデュエルです。

楽しみに!!

第11話「決戦！地縛神！」

「プレシアアアアアッ！！！」

「ジャックさん…声大きいですよ」

「はうう…耳があ」

「フェイト！大丈夫かい！？」

最終決戦でジャックのテンションはMAXになっており大声で扉を蹴り開いた。

近くにいたなのはとフェイトはあまりにも大きい声だったので耳を抑える。

「これって最終決戦だよね？」

ユーノはそんな光景を1人そう感じているのだった。

「元気な声ね。だけど、その元気いつもで続くかしら？」

プレシアは不敵な笑みでジャックの事を見つめる。

「ふん！俺の荒ぶる魂は誰にも止められんっ！さあ！デュエルだっ！！！」

「ふふ、いいわよ！さあ…きなさいっ！！」

するとプレシアの腕が不気味の輝き始める。そしてジャックの目の

前に…」

「何故…俺のD・ホイールが…それに貴様のその痣はっ!!」

目の前に現れたホイール・オブ・フォーチュンを驚いた顔で見る。
しかし、それより気になるのが…プレシアの腕にある痣…あれは…。

「貴様は俺が倒したはずだっ!!」

「ふふ、確かに私はあなたと赤き竜によって1度は倒されたわ。しかし!この女の心の闇が再び私を蘇らしたのよっ!!」

プレシアの腕の痣はかつてジャックがダークシグナー戦の時、カーリーが使っていた地縛神の1つ…ハチドリの神、地縛神アスラ・ピスクだった。

「ならば!再び俺が…貴様を倒してくれるっ!!」

ジャックはデッキを変え、D・ホイールに乗り込みプレシアの姿を
した地縛神を指差す。

ジャックの痣も地縛神に反応して強く輝く。

「いいだろう!シグナーを倒し…我が…完璧なる神となるっ!!」

地縛神はデュエルディスクを構えD・ホイールではなく飛行魔法で
自らを浮かばせる。

そして、部屋が異様な空間に包まれる。紫色の炎で何かが描かれ始
めた。なのは達はびっくりしてその炎を避ける。

「この炎は…？」

「なのは！その炎に触れてはならん！」

「は、はいっ！」

なのははジャックの言う事を聞いてその場に止まる。フェイトとアルフ、ユーノは心配そうにジャックを見つめる。

「…ジャック」

「ん？…心配するな。俺は絶対負けんっ！！」

そう言つてD・ホイールをプレシアの隣に止める。

「プレシア…いや！地縛神！覚悟するんだなっ！」

「くくくっ…覚悟するのは貴様だっ！いくぞ！！」

ジャックはD・ホイールのエンジン音が激しく鳴り響く。

「フィールド魔法《スピード・ワールド2》セットオンッ！！」

『デュエルモード・オン。オートパイロット・スタンバイ』

「ライディングデュエル！アクセラレーションッ！！」

今ここにシグナーと地縛神のデュエルが再び始まった…。

ジャックLP4000 手札5

地縛神LP4000 手札5

「私のターン、ドローツ！私は《クリッター》を守備表示で召喚！」

クリッター

守600 星3

「カード2枚伏せてターンエンド！」

地縛神LP4000 手札3 Spc0

場 クリッター 伏せ×2

地縛神は守備を固めてきた。しかし、ジャックには守備モンスターは絶好の獲物だ。

「俺のターンッ！」

ジャックSpc0↓1

地縛神Spc0↓1

「俺は《ツイン・ブレイカー》を召喚！バトル！《ツイン・ブレイカー》で《クリッター》を攻撃！」

クリッターが剣で真つ二つになる。

地縛神LP4000↓3000

「うう！《クリッター》がフィールドから離れた時、デッキから攻撃力1500以下のモンスターを手札に加える！私は《グレイブ・

スクワーマー』を手札に加える」

手札に強力なカードを加える地縛神。しかし、ジャックの猛攻は止まらない。

「《ツイン・ブレイカー》が守備表示モンスターを攻撃した時、もう1度攻撃することができる！ダブル・アサルト！」

「させぬ！罨カード《ドレイン・シールド》！攻撃を無効にして攻撃したモンスターの攻撃力分回復する！」

ツイン・ブレイカーの攻撃が黄色の防壁によって止められる。

地縛神LP3000↓4600

「くっ！俺はカードを2枚伏せてターンエンド！」

ジャックLP4000 手札3 Spc1

場 ツイン・ブレイカー 伏せ×2

「我のターン！ドロー！」

ジャックSpc1↓2

地縛神Spc1↓2

「罨カード《リビングデットの呼び声》！効果により《クリッター》を特殊召喚！さらに《クリッター》をリリースして《邪帝ガイウス》をアドバンス召喚！」

邪帝ガイウス

攻2400 星6

クリッターが地面から現れたと思いきやすぐに消えフィールドに黒い帝が現れた。

「ガイウスがアドバンスト召喚に成功した時、相手フィールドにモンスター1体を除外する！」

「させるか！《デモンズ・チェーン》発動！」

ガイウスが鎖によって拘束される。

「このカードを相手の効果モンスターの効果を無効にし、さらに！攻撃を封じる！」

「防いだか。カード1枚伏せてターンエンド」

地縛神LP4600 手札4 Spc2

場 邪帝ガイウス（デモンズ・チェーン） 伏せ×1

「俺のターンッ！」

ジャックSpc2↓3

地縛神Spc2↓3

「スピード・スペル《Sp・オーバー・ブースト》！Spcを4つ増やす！」

ジャックSpc3↓7

ジャックのD・ホイールがスピードが増す。地縛神を軽く追い越している。

「さらにスピード・スペル《S p・ハーフ・シーズ》！S p cが3つ以上ある時発動！貴様のガイウスの攻撃力を半分にし、ダウンした攻撃力の数値だけ自分のライフポイントを回復する」

邪帝ガイウス

攻2400 ↓ 1200

ジャックLP4000 ↓ 5200

ガイウスがパワーダウンしジャックのライフが回復する。

「《マッド・デーモン》を召喚！バトル！」

地縛神LP4600 ↓ 4000

「さらに《ツイン・ブレイカー》で攻撃！」

地縛神LP4000 ↓ 2400

「そして《スピード・ワールド2》の効果によりS p cを7つ取り除くことで1枚ドロ！ターンエンド！そして《S p・オーバー・ブリスト》の効果でエンドフェイス時に1になる。しかし、俺のS p cはすでに0！減ることはない」

ブースターは止まりプレシアの後ろに下がる。

ジャックLP4000 手札2 S p c7 ↓ 0

場 マッド・デーモン ツイン・ブレイカー 伏せ×1

「私のターンッ！」

ジャックSpco↓1

地縛神Spcc3↓4

「私はスピード・スペル《Sp・エンジェル・バトン》！Spccが2つ以上ある時、デッキより2枚ドローし手札から1枚墓地に送る」
プレシアはカードを墓地に送り、フツと笑う。

「このモンスターは通常のドロー以外で手札に加わった時特殊召喚する！現れよ《ワタポン》！」

ワタポン

攻200 星1

この場の空気には会わないモンスターが登場。しかし、これが地縛神への布石。

「さらに《星見獣ガリス》の効果！デッキのトップを墓地に送りそれがモンスターだった場合、相手にそのモンスターのレベル×200ポイントを与え、このモンスターを特殊召喚する！」

「（やばい！これが成功すれば奴の場にはモンスターが2体…地縛神が召喚される！）」

ジャックは警戒している。もし地縛神が召喚されれば…なのは達の魂が…！

「カードを墓地に送る……アハハッ！墓地に送られたのは《終末の騎士》！よってこのモンスターを特殊召喚！そして《終末の騎士》のレベルは4！800ポイントのダメージを食らうがいいっ！！」

ガリスが召喚されジャックに向けてエネルギー砲を放つ。

「ぐあああっ！！」

ジャックLP4000↓3200

「さあ…準備は整った！！」

「まさか！やめろっ！！」

地縛神は自分の手札と自分の場を見つめ高らかに笑う。ジャックは何をしようとしているのか確信した。

「自分の場の2体のモンスターをリリースし現れよっ！！」

「くそおっ！！お前等！！ここから逃げろっ！！」

モンスターが2体消えると頭上に心臓のような殻が現れる。ジャックはなのは達にここから離れるように叫ぶ。

「へ？いったいどうしたんだろう？」

「分からないけど…あの様子じゃ、ただごとじゃないことは明らかだねえ」

「皆！ここはジャックさんの言うとおり離れよう！！」

そう言いその場から離れようとしたが…もう…遅かった。

「遅いわ！！さあ！貴様等の命…地縛神に捧げよう！！」

するとなのは達の体が透ける。

「な、何っ！？」

「体が…！？」

「あああっ！！」

「うわああっ！！」

魂が吸い取られていく……。

「やめろおおおっ！！！！」

ジャックは叫ぶ。だが…その叫びは意味がなかった。

「現れよ！！《地縛神 アスラ・ピスク》！！！！」

現れてしまった。ジャックが元の世界で以前倒した地縛神……なのは達の魂を生贄にその禍々しい姿を……ジャックはD・ホイールに乗りながら…なのは達がいた所を見つめる。

「なのは…ユーノ…フェイト…アルフツ！…俺が…必ず！救ってみせるっ！！！！」

第11話「決戦！地縛神！」（後書き）

次回予告

「地縛神！貴様は…俺が必ず倒すっ！！なのは達を…救ってみせる
！！」

次回荒ぶる王者！魔法の世界で列を成す！

『救世の光！セイヴァー・デモン・ドラゴン』

ライディングデュエルアクセラレーション！！」

第12話「救世の光！セイヴァー・デモン・ドラゴン」（前書き）

ついに地縛神とのデュエルが決着！！

お楽しみに！！

第12話「救世の光！セイヴァー・デモン・ドラゴン」

地縛神アスラ・ピスク

攻2500 星10

「行くぞ！貴様も知っているだろうが地縛神は攻撃対象にならない。そして、魔法・罠も効かない。さらにいくらモンスターを並べようと神の前では関係無い！ダイレクトアタックができるからなっ！」

「ちっ！来るなら、早く来いっ！！」

地縛神を召喚したことで上機嫌になっており完璧にジャックを見下している。

ジャックはそんなことはいいから早く進めると何か焦っているように怒鳴る。

「言われなくとも…我は《ツイン・ブレイカー》を攻撃！！」

ダイレクトアタックをせずにまずはモンスターを減らしていく作戦にした地縛神。

「ぐあああああっ！！」

ジャックLP3200↓2300

「久しぶりの神の攻撃はどうだ？アハハ！カードを1枚伏せてターンエンド！」

地縛神LP2400 手札1 Spc4

場 地縛神アスラ・ピスク 伏せ×2

良い気持ちだと分かるような顔でカードを伏せターンを譲る地縛神。

「お、俺のターンッ!!」

ジャックSp c 0 ↓ 1

地縛神Sp c 4 ↓ 5

「俺は《トップ・ランナー》を召喚!そしてレベル4《マッド・デーモン》にレベル4《トップ・ランナー》をチューニング!王者の鼓動、今ここに列を成す。天地鳴動の力を見るがいい!シンクロ召喚!我が魂!!」

レッド・デーモンズ・ドラゴン

「出たな…シグナーの龍!!」

レッド・デーモンズ・ドラゴンがフィールドに現れた瞬間に地縛神の顔が激変した。

「対象にならなければ貴様に直接攻撃するまでだ!《レッド・デーモンズ・ドラゴン》でダイレクトアタック!アブソリュート・パワーフォースッ!!」

「《ドレイン・シールド》!!」

地縛神LP 2400 ↓ 5400

「またか!?くそっ!ターンエンド!」

ジャックLP 2300 手札1 Sp c 1

場 レッド・デーモンズ・ドラゴン 伏せ×1

これで決められると思いきやまたもやライフを回復される。そして、次の地縛神のターンで確実にダイレクトアタックをしてくるだろう。

「私のターンッ！」

ジャックSpC1↓2

地縛神SpC5↓6

「これで終わりだ！《地縛神アスラ・ピスク》でダイレクトアタックッ！！消える！シグナーツ！！」

「そうはいかん！《バトルフェーダー》を特殊召喚！相手がダイレクトアタックをしてきた時にこのモンスターを特殊召喚しバトルフェイズを強制終了させる！」

バトルフェーダー

守0 星1

地縛神の攻撃が通る前にバトルフェーダーが召喚されバトルを強制に終了させた。

「しゅといーターンエンドだ！」

地縛神LP5400 手札2 SpC6

場 地縛神アスラ・ピスク 伏せ×1

「（くそっ！何とか攻撃を防いだが……俺に手札が無い。それに奴には魔法も罠も効かない。もし、俺が魔法か罠を引いたら……負け

る。俺は…救えないのか？仲間を…大切な仲間を…！」

ジャックのターンなのにカードを引こうとはしない。それを見た地縛神は甲高い声でジャックに言葉を投げつける。

「ジャック・アトラス！所詮貴様は真の闇の力を得た我の敵ではない！我は貴様を倒し他のシグナーも倒す！さあ…降参すんだなっ！」

「何！？遊星達を…！させん！そんな事はさせんぞ！」

「させないだと？アハハハッ！！笑わせてくれる。貴様に仲間が救えるとも思っているのか？実際、貴様は救えていないではないか！！」

地縛神の発言に反応して顔を上げるジャック。他のシグナーを倒す？ジャックはその言葉に激怒し叫ぶ。しかし、地縛神は本当に仲間を救えるのか？と嘲笑う。

「救ってみせるっ！！必ず…俺は約束をした！何がなんでも…救ってみせるとっ！！」

右拳を地縛神に突きつけジャックは叫ぶ。自分は救ってみせると…約束した…そうあればこの部屋に移動中のことだった…。

『あの…ジャックさん』

『ん？どうした？…まさか怖気ついたのではないだろうな？』

『ち、違います！ただ…』

『ただ…何だ？』

なのはは不安な顔でジャックに尋ねる。そんななのはを見てジャックは思った言葉をなのはに言う。

しかし、なのははその言葉を否定する。だったら何だ？と尋ねるとなのは俯く。

『ただ…不安なんです。もし…自分がやられちゃったらって…』

『……ふん！そんな事を考えていたのか。馬鹿らしい！』

『ば、馬鹿らしいって何ですか！？私は…！』

『何度でも言おう！馬鹿らしいとなっ！何のために俺がいると思っているのだ！』

『え？』

不安がっているなのはの言葉をジャックは馬鹿らしいと言う。なのははその言葉に反発するように身を乗り出す。しかし、ジャックはなのはの言葉を切るように叫ぶ。

『お前がピンチになった時、捕まった時、俺が救ってやるためだろっ！！そんなことも分からないのかっ！！！！』

『私がピンチになった時、捕まった時にジャックさんが助けてくれる？ほ、本当ですか！？』

ジャックの言葉になのはは頬を赤く染めながらも聞いてくる。

『あたりまえだっ！俺達は仲間だっ！！助け合つのはあたりまえのことだ。もちろん、フェイトやアルフ、ユーノ、この世界の人々を俺は救ってみせるっ！！』

『……私だけじゃないんだ（ボソ）』

『ん？何か言ったか？』

『なんでもないですよ！！』

小声で何かを言ったような気がして聞くが機嫌を悪くしているようでズカズカと先に進んで行ってしまった。

『何なんだ？あれは？』

『え、えっと……私は分かるような気がする。私も……／／／』

『あんたって鈍感だねえ』

『あはは……』

残った者にどう言う事だ？聞くもフェイトは顔を真っ赤に染め、アルフは意味ありげな言葉を、ユーノはただ苦笑しているだけだった。

「そうだ…俺は…俺は…！あいつらを救うっ！！！」

その言葉に答えるように痣が強く、強く輝く。そして腕から消えた。

く元の世界く

「これは…！ジャック…お前は何処かで仲間のために…絆のために闘っているんだな。ならば！俺も…力を貸すぞっ！！」

ドラゴン・ヘッド

「ん？あいつ…どこかに行っただと思っただら…！…しかなねえな！」

ドラゴン・テイル

「あら？…ふふ、またジャックが無茶をしているのね。だったら怪我をしないようにね！」

ドラゴン・レッグ

「龍可っ！！これって…」

「うん！ジャックが…力を貸してって言っている！」

ドラゴン・ハート、ドラゴン・ウィング

次元を超えジャックの思いがチーム5D・sの皆に届いた。

「これは…！そうか…お前達…力を貸してくれるのだな。だったら俺は答えてみせるっ！！俺の…ターーンッ！！！」

ジャックSpC2↓3

地縛神SpC6↓7

ジャックの背中にシグナーの痣が集まる。そして、ジャックは輝くデッキトップを力強く引く。

「俺は《救世竜 セイヴァー・ドラゴン》を召喚！」

救世竜 セイヴァー・ドラゴン

攻0 星1

「このモンスターは……!？」

輝く救世の竜に焦る地縛神。

「貴様にもう1度見せてやろうっ!! 救世の力を! レベル8《レッド・デーモンズ・ドラゴン》とレベル1《バトルフェーダー》にレベル1《救世竜 セイヴァー・ドラゴン》をチューニング!!」

セイヴァー・ドラゴンが巨大化しレッド・デーモンズとバトルフェーダーを包み込む。

「研磨されし孤高の光、真の覇者となりて大地を照らす! 光輝け! シンクロ召喚!!」

そしてD・ホイールでジャンプし一体化する。

セイヴァー・デモン・ドラゴン
「大いなる魂!!!!」

セイヴァー・デモン・ドラゴン

攻4000 星10

かつてアスラ・ピスクを倒したモンスターセイヴァー・デモン・ドラゴンがその覇者たる姿で睨みつける。

「…俺は貴様のかつての主である者に教えられた…傷つき病んだ心も真に思いやる心で癒されると…」

「？」

攻撃もせずにジャックは語り始める。それは自分を救ってくれたカリーに教えられたこと。

「俺は見た！プレシアの瞳が…悲しみに染まっていたのを！」

「何を馬鹿な…ッ！…うう！あああつ…！」

地縛神はジャックの言葉を否定しようとしたが当然苦しみだす。

「じゃ、ジャック・アトラス…！」

「…！プレシア…なのか？」

「そう…よ。ジャック・アトラス…私の事は…いいわ。…さっさと決めなさい」

「しかし！フェイトはどうなる！あの時も言ったが、生まれはどうあれフェイトはお前の娘だっ…！お前がいなくなったら…フェイトは孤独になる…！お前は…それでいいのかっ…！」

そう…プレシアがいなくなれば母親の温もりを感じずただ孤独に成長する。そんなことはジャックが許さなかった。孤独は……分かる

から…。

「……私は…フェイトに温もりを…与えてやれないわ。…だけど、あなたなら…フェイトの心を癒す…その魂なら！…だから…お願い」

「ッ！……分かった」

「や、やめろっ！この女がどうなってもいいのかっ！？」

自分がフェイトに温もりを与えてやれないと悲しげな顔で言う。ジヤックは思い出した…ダークシグナーになるものは…死人だと。地縛神はプレシアと意識が混じりながら攻撃をするなど言う。

「貴様は…絶対に許さんっ！！《セイヴァー・デモン・ドラゴン》の効果発動！1ターンに1度、相手モンスターの効果を無効にし無効にしたモンスターの攻撃力分アップする！パワー・ゲイン！」

セイヴァー・デモン・ドラゴン

攻4000↓6500

口から放たれる光は地縛神を結晶化させ完全に動きを封じる。

「さらに《インフェルノ・ロード》を発動！墓地に存在する闇属性か炎属性モンスターを選択し除外する。俺は《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を選択！そして除外したモンスターの攻撃力をフィールドのモンスター1体に加える！」

セイヴァー・デモン・ドラゴン

攻6500↓9500

セイヴァー・デモン・ドラゴンとアスラ・ピスクを繋ぐように紫色の炎の道が現れる。

「プレシア…今…楽にしてやる。《セイヴァー・デモン・ドラゴン》で《地縛神アスラ・ピスク》を攻撃！アルティメット・パワーフォースッ！！！」

「我等、地縛神の野望があっ！！！」

地縛神LP5400↓0

地縛神は砕け散り、地上絵が消え、生贄とされたなのは達も解放された。その少し後にクロノ達管理局が合流する。

「おい！ここは崩れるぞっ！早く脱出するんだっ！！！」

「で、でも！ジャックさんが…！」

なのはの焦りはジャックがこの場にいないこと。地縛神を倒したのはいいが、倒した本人がその場にいない。

「なのは！このままじゃ、次元の彼方に飛ばされるよ！早く行こうっ！」

「離してよ！ジャックさんが…ジャックさんがっ！！！」

「母さん…ジャック…！」

「フエイトも早くここから離れないと!!」

その場から離れなかったなのはとフエイトは管理局の武装部隊とユニノ達が無理やりその場から連れ出した。

そしてジャックの行方が分からず時の庭園は崩れ落ちた。そして、無事に戻ったのはとフエイトは行方が分からないジャックの事を待っていた。

そう…きっと…何処かでいつもみたいに高らかに笑っているだろう。そして、何事も無かったかのように元気に帰ってくることを信じて……。

第12話「救世の光！セイヴァー・デモン・ドラゴン」（後書き）

次回予告

次回はついに！無印最終回！！感動の最終回にできるよう執筆を頑張ります！！

「次回！荒ぶる王者！魔法の世界で列を成す！」

『俺がジャック・アトラスだ！』

ライディングデュエルアクセレーション！！！！」

無印最終話「俺がジャック・アトラスだ！」（前書き）

最終回です！！若干自分で執筆しといてやりすぎたと思うぐらい詰め込みました！！

それでは無印編最終回お楽しみに！！

無印最終話「俺がジャック・アトラスだ！」

「ここは……何処だ？」

地縛神を倒しジャックは光に包まれ意識を失っていた。
そして気づくと、そこはとても不思議な場所だった。

「こんな野原…海鳴市にあったか？…とにかくなのは達の所に戻らねば」

場所が分からない野原をD・ホイールで走り続ける。

「ん？あの木の下にいるのは…」

しばらくして目に入ったのは大きな木だった。この無限に続く野原に1本だけ生えている木の下に人が1人座っていたのだ。

「ジャック・アトラス…あなたも来たのね」

D・ホイールを近くに止め近づくと声をかけられる。

「プレシア？なのか？」

「ええ。あなたに助けられたことで…こうして『人間』としてここに
いるわ」

その人物はなんと先ほどまでジャックとデュエルをしていたプレシアだった。

プレシアは穏やかな顔でジャックに語り始める。

「ここは虚数空間…私とあなたはデュエルの後この空間に落ちたのよ。私はともかくあなたはここには来るべきじゃないわ」

「しかし、帰り方が分かん」

そう…いくらここから立ち去れと言われても、帰る方法が分からない。
がむしゃらに進んだとしても、変わらない無限の野原が見えるだけ…。

「そうね。……はつきり言って私も分からないわ」

「私だったら分かるけど？」

「！お前は…アリス？管理局に拘束はされなかったのか？」

帰る方法が分からず青空を見上げながら考えていると木の上から少女が下りて来た。その少女は…なんと管理局に拘束されているとばかりと思っていたアリスだった。

「ふーんだ！あんなのろまどもに捕まるアリスじゃないもん！！それより！本当に帰りたいの？」

「あたりまえだ！お前知っているのか？」

「うん、知っているよつと！」

「お、おい！」

ジャックの周りをぐるぐる回っていると思いきやジャックの肩に乗るアリス。

「ほら、あっちに光が見えるでしょ？そこに行けばここから出られるよ」

「本当か？」

肩車をしながらジャックはアリスの指差す方にある光を見る。
実際本当なのか信じがたいが…今は、アリスを信じるしかない。

「あ！お母さん！」

「！あ、アリシア？どうしてあなたが…」

プレシアがジャックとアリスのやり取りを見てみると、もうその笑顔を見れないとばかり思っていたアリシアが手を振ってプレシアの下に走ってくる。

「私が見つけて連れて来たのよ。見つけた時もなんかすごく元気だったよ。私も疲れるくらい」

「あれがアリシア…こうして見比べると本当に似ているな。だが、素直さはアリスよりアリシアの方が上のようだな」

「うっさい！！」

「っ！や、やめろ！暴れるな！！」

「うっさい！！うっさい！！」

アリシアとアリスを見比べて感想を言っていると肩車のままアリスはジャックの頭をポカポカと殴る。

その光景はまるで仲が良い親子に見える。

「お母さん？アリスが叩いているお兄ちゃんって誰？私も遊んでいいの！」

「……ふふ♪ええ、いいわよ」

「やった〜♪突撃♪」

アリシアはプレシアの胸の中でジャックとアリスを見て遊びたいというのが分かるほど体をうずうずさせている。プレシアはそんな娘を見て笑顔で了承しアリシアはジャックの方に突撃して行った。

「お兄ちゃん♪あ〜そば♪」

「アリシア？おわあ！？」

「こ、こら！バランスを崩すな！！」

「無茶を言つな！お前が下りれば良い話だろう！！」

「あははは♪」

アリシアが突撃してきてバランスを崩すジャック、肩に乗っていたアリスは落ちそうになりジャックの頭にしがみつく。

「今は…楽しく遊びなさい。もう…こんなことは無いと思うから…」

楽しく遊ぶアリシアを見て静かに言うプレシア。
この言葉は嘘ではない。プレシアとアリシアはもう死んでいる……現実には戻れないのだ。

「はぁ……はぁ……お、お前等……俺を殺すきか!!」

「うるさいわね!男がこんなことで根を上げるんじゃない!!」

「ああ♪楽しかった♪また、遊んでね、お兄ちゃん♪」

あれからどれくらいになったろう……ジャックは野原に寝そべりアリスとアリシアもジャックの両脇に寝そべっている。

「ふう……さて、俺はそろそろ戻る。アリスお前も来るんだ」

「……私は……行かない」

「何?お前ここに残るといのか?」

少し体力が戻ったところでD・ホイールに乗りアリスと一緒に戻ろうと言うジャック。しかし、アリスはその誘いを断って此処に残ると言う。

「私は……ここでアリシアと……母さんと一緒に残る」

「!」

静かにアリシアの手を握ってそして…プレシアを見つめて残るわけを話だす。

「ここでアリシアと一緒に遊んでるわ。今まで遊べなかった分がこの子と遊ぶわ！フェイトには…あなたとあの白い魔導師…そして他にも友達がいるけど…この子には1人もいないから…」

「アリス…分かった。フェイトの事は任せる！」

「泣かせたり、傷つけたりしたら…許さないわよ！傷つけた私が言っても説得力ないけど。こっちに来てアリシア」

「?…うん」

アリスはアリシアを連れてプレシアの下に走って行く。アリシアはプレシアに抱きつき、アリスはジャックの方に戻ってきた。

「ジャックこれ」

「これは…カードケース？」

「私からの餞別よ。それとこれは返すわ」

ジャックにスレイヤーと似たようなカードケースを渡し、そしてポケットから1枚の紙を突きつける。

「こいつはお前にやった翠屋の無料券ではないか」

あの時、アリスに渡したのは翠屋のケーキ1つの無料券だった。

「これはフェイトにあげなさい。私には必要ない物だから……ジャック」

「どうした？」

「バイバイ」

アリスは顔を赤くしながらジャックの頬にキスをしてプレシア達の所に駆けて行った。

「……ずいぶんと益せた女だ」

D・ホイールを走らせようとエンジンをかけるとアリシアが大声で叫んだ。

「お兄ちゃん！！また、遊ぼうねっ」

「……ああ！このジャック・アトラスが、いつでも相手になってやる……」

高らかに言葉を叩きつけ出口があるという光の下に風と共に駆け抜けていった。

ジャックの行方が分からなくなってから数日後まだ、元気が無いなのはを氣遣ってフェイトは会いたいと電話をかけてきた。元氣付けるのもあるが…裁判のため本局に移動することを伝えるのもあった。

「フェイトちゃん！」

少し元気はあるようだがそれでもいつもの元気は無い。
フェイトはそんなのはに小さく手を振る。

「あんまり時間が無いが…ゆっくり話すといい。向こうにいるから」

「ありがとう！」

「ありがとう」

クロノとアルフ、ユーノは2人を残して離れた所に移動して行った。

「にやはは、何だかいっぱい話したことあったのに、変だね。フェイトちゃんの顔を見たら忘れちゃった」

苦笑しながら言うのは。

「私は……そうだね、私も上手くは言葉にはできない」

フェイトも同じく言葉を表せないようだ。

「だけど、嬉しかった」

「え？」

フェイトは波を見ながら思い出しながら語る。自分に何度も、何度も言葉をかけてくれた。

「君が言ってくれた言葉。友達になりたいって……」

「あ…うんうん！」

フェイトの言葉で少しずつ元気になってくるのは。フェイトは溢れ出る言葉を全部なのはにぶつける。

「私に出来るなら、私でいいなら……。だけど、私……。どうしたらいいのかわからない。だから教えてほしいんだ。どうしたら友達になれるのか……」

勇気を振り絞って自分の言いたい事を言った。なのははその言葉にさらに元気になる。

「簡単だよ」

嬉しさを押さえきれないほど嬉しくて、顔が火照りながらフェイトに教える、友達のなり方を…。

「友達になるのはすごく簡単」

笑顔で言う。そう、友達になることはとても簡単だ。ただ、一言…。

「名前を呼んで。始めはそれだけでいいの。『君』とか『あなた』とかそういうのじゃなくて。ちゃんと相手の目を見て、ハッキリと相手の名前を呼ぶの」

名前を呼んで欲しい。ずっと、友達になりたかったこの子に。

「私、高町なのは。なのはだよ！」

「なのは……」

「うん！そう！」

まだ、慣れないようだが、名前を呼んでくれた。もっと、呼んで欲しい。もっと、もっと！自分の名前を友達になりたいから…。

「な、の、は…」

「うん！」

嬉しくて元気に頷く。

「なのは」

「うん！」

そして、あまりにもの嬉しさにフェイトの手を握る。

「ありがとう、なのは」

「うん！」

涙腺が緩む。ジャックの行方がなくなつた時にたくさん泣いたのに…また…泣いてしまう。それほど、嬉しいのだ。

「君の手は暖かいね。なのは」

友達の…今なつた…友達の暖かさが感じる。こんな感じはその時…そう、ジャックがジユエルシードの封印の時に握ってくれた時以来

の暖かさだった。

「少しわかったことがある。友達が泣いていると自分のことに自分も悲しいんだ」

涙を流すなのは優しく抱きしめながら、語る。今まで言いたかったこと。全部、目の前で泣いている大切な友達に。

「ありがとう、なのは。今は離れてしまっけど、きっとまた逢える。そしたらまた君の名前を呼んでもいい？」

「うん…うん…！」

泣きながらも強く頷くのは。

「会いたくなったら、きっとまた名前を呼ぶ」

フェイトもとうとう限界がきて涙を流す。

「だから、なのはも私を呼んで。なのはが困った事があったら今度は、私がなのはを助けるから」

お互いに見つめ合う。そんな事をしているとクロノが近づいてくる。

「時間だ。そろそろいいか？」

名残惜しいが…そろそろ…別れの時間。

「フェイトちゃん！」

立ち去るフェイトの名前を呼ぶ。
髪を結んでいる自分のリボンを外しながら。

「思い出に出来るもの、こんなしかないんだけど……」

そしてフェイトに差し出す。それに答えるようにフェイトも。

「じゃあ、私も……」

自分の黒いリボンを外したのはに差し出す。

「ありがとう、なのは。……ジャックは……きっと大丈夫だよ」

「！……そうだよ。……ジャックさん……何処に……いるのかな？」

最後になのはを心配してジャックの事は大丈夫と言う。なのはもそんなフェイトの気遣いに気づく。そして2人で青空を見る。あの人は何処にいるんだろう？と思いつつながら。

「あ、あれ？何か聞こえない？」

「え？……本当だ。……エンジン音？……まさか！」

エンジン音のする方を息ピッタリで振り向くと……。

「俺がジャック・アトラスだ！！」

太陽から下りて来たかのようにD・ホイールが現れる。なぜか自分の名を名乗りながらいつものように無駄に元気なその声で皆の前に……。

「戻ってきたぞ。お前等！」

地面に着地し急ブレーキをかける。キーー！と音を鳴らしながらD・ホイールを止める。そして、下りると…右手で自らの胸を叩き叫んだ。

「ジャックさんっ！！」

「ジャックっ！！」

「うおっ！？……お前等…目が赤いぞ？どうした、もしかして泣いていたのか？」

ジャックが戻ってきて、なのはとフェイトは思わずジャックの胸に飛び込んでしまった。そんな彼女達をバランスを崩すもギリギリで受け止める。

「ジャックさん！ジャックさん！」

「今まで、何処にいたの？心配…したんだよ」

「俺は、地縛神を倒し虚数空間に落ちていた。…そこで…プレシアとアリスそして…アリシアと出会った」

自分が地縛神を倒した後の事を懐かしいような顔で語る。そんな語るジャックのとある言葉にフェイトはビクッ！と体が跳ねる。

「母さんとアリス…それに…アリシアも？本当なの！」

「ああ、俺は嘘はつかん。それに言葉と贈り物も預かっている。まずはアリスからの贈り物だ」

「これって？」

「ああっ！？それって翠屋のケーキ無料券！それがあれば家のケーキが1つ無料でもらえるんだよ！でも、何でこれをあの子が？」

ジャックがアリスにあげた券をフェイトに渡すようにと言われているので懷から出し渡す。フェイトは首を傾げ、なのはも疑問に思いまた首を傾げる。

「自分には必要な物だからフェイトに渡してくれ、そう言われた。本当は俺がアリスに渡した物だったんだがな。最後に…プレシアからの言葉だ」

「……母さん」

プレシアからの言葉と聞いて少し不安になるフェイト。しかし、なのはが手を握る。不安が…吹き飛んだ。そうだ、今の自分には大切な友達がいる。

「いいようだな。それでは言うぞ」

そう言つて、手紙を広げる。プレシアから帰る前に止められて無理やり渡されたものだ。

『フェイト、私は自分のしたことを許して欲しいとは言わない。こんな母を恨んでくれてもかまわない。こんな言葉しかあなたに送れないけど……フェイトあなたの幸せな姿、あなたの成長…遠い空か

から見守っているわ。

『大好きな私の娘フェイトへ』

「……うう… かあ…さん…ううう…」

「フェイトちゃん」

手紙を読み終わるとフェイトは涙を流していた。プレシアの…母親の本当に気持ちが分かったから、嬉しくて涙が止まらないのだ。なのはフェイトを優しく抱きしめる、フェイトがしてくれたように。

「フェイト、泣くな。そんな事ではプレシアとアリシア、アリスから笑われるぞ！」

「！……そう…だよね。…うん！私、母さん達に笑われないように…頑張るっ…！」

慰めの言葉をフェイトに送るジャック。フェイトはジャックの言葉に涙を拭う。母さんに…アリシアに…そして、アリスに笑われないように…頑張ると決心して。

「それじゃ、私…もう行くね」

「ん？何処に行くのだ？」

「あ、ジャックさんは知らなかったですよ。フェイトちゃん、これから本局に移動するんです。裁判のために」

「本局…」

ジャックにも再会できて、母親からの手紙とアリスからのプレゼントを胸に抱きクロノ達の所に歩いていく。ジャックは何処に行くのか分からず聞く。その説明をなのはから聞き、ジャックはある事を考えた。

「クロノ、本局に行けば俺も魔導師になれるのか？」

「…ああ。君の実力ならすぐに囑託魔導師になれるはずだ」

「ならば！俺も本局に行く！！」

「え？えええええつ！！！！」

クロノはジャックの質問に冷静に答える。その事を聞いたジャックは自分が魔導師になることをその場に宣言する。あの…ジャックが？

「じゃ、ジャックさんが魔導師になるために本局に…（ということ！フェイトちゃんと一緒に！）駄目！駄目！だめえ！！そんなの私が許さないの！」

「何！？」

変な妄想をしたのだろうなのは、全力全開でジャックが（フェイトと一緒に）本局に行くことを否定した。ジャックは予想外に言葉に驚きを隠せない。

「そんなこと私が許さないの！！……って！フェイトちゃん！さりげなくジャックさんの手を握ろうとしないのっ！！」

「…しし、してないよ！！私、そんなこと！！」

「嘘！私見たもん！！フェイトちゃん、嬉しそうに握るうとしてたもん！！」

さつきまで良い感じになっていたのに、ジャックの一言でその場の空気はガラリと変わった。仲良く友達になった2人もジャックを巡って言い争っている。

「なのはの奴、どうして否定をするのだ？」

「それは君が深く関係していることは確かだ」

「やっぱり、あんたって鈍感だねえ」

「ははは。そこがジャックさんらしいと言ったららしいけど」

本当に時間が無いのにクロノとアルフ、ユーノはなのはとフェイトの言い争いを苦笑しながらも見守っていた。ジャックは1人、D・ホイールに乗って待っているが。

結局、言い争いが終わらなくてジャックが試験が終わったらくさん甘えてさせて欲しいと言うなのはの願いを半ば無理やりに了承したようだが…それでOKになった。

そして心を心地良い風が吹き荒れる。

まるで、彼らを祝福するように…。

次に会う時は…魔導師として…大切な友達として、再会することを胸に刻んで…。

荒ぶる者達は、別れた。

無印最終話「俺がジャック・アトラスだ！」（後書き）

次回予告A・S編

「お前… 良い度胸だ！ベルカに騎士に1人で挑むとはなっ！！」

「俺のパワー！貴様等に見せてくれるっ！！」

「飛翔せよ！《スターダスト・ドラゴン》！！」

「スターダストだと！貴様、まさか！？」

「あ〜んやで、ジャックお兄ちゃん♪」

「ふむ、中々の味だ」

「「ジャックさんがあ！！？」」

「次回荒ぶる王者〱魔法の世界で列を成す〱A・S編
ライディングデュエルアクセレーション！！！」

活動報告の方にアンケートがあります。気が向いたらコメントをお願いします。

第1話「王者と夜天の出会い」（前書き）

A・S編です。お楽しみに！！

そういえば、次の小説をクロウかブルーノどちらかでやるというアンケートですが…私は我慢弱く、落ち着きの無い男なのさ。

と！言うわけで、アンケートの結果と作者である私の考えで次の小説は決定しました。ただいま執筆中です。アンケートにご協力してくださいました方々はありがとうございます。どっちが主人公になっているかは…ご想像にお任せします。今日中には…投稿できるかな？長くなりましたが、漆黒のカリスマの作品をこれからも宜しく願います！！それでは、本編にどうぞ！

第1話「王者と夜天の出会い」

プレシア・テストロッサ事件通称『P・T事件』から数ヶ月…フェイト・テストロッサは裁判のために本局でクロノとアルフ、ユーノそしてジャックと一緒にアースラに乗っている。今は、クロノがジャックに大切な話があると言う事で食堂に集合している。

「何だ、急に呼び出して。くだらない用だったら、俺は帰るぞ」

「全然くだらなくはない。君にはある事件の調査に手伝ってもらっ」

ジャックとクロノは向かい合うように席に座り話合う。だが、ジャックは相当命令されるのが嫌いらしく少し威嚇するようにクロノを睨む。しかし、クロノは顔色を変えず冷静に任務の内容を伝える。

「何？海鳴に行けだ？……ふん、良いだろう。丁度こんな堅苦しい所から抜け出すつもりだったからな」

「……そうか。だったら、さっき言ったことを調べてくれ」

「俺は、俺の好きなように動く」

「お、おい！」

久しぶりに海鳴市に戻れると思ったら、任務のためだった。ジャックはやはり少し後悔していた。職を探すのが面倒だったため魔導師になることを決めたが…此处は堅苦しい奴等ばかりで苛立っていたところだった。1度はなのはの家の皿洗いが恋しくなることもあった。

あれから数ヶ月がたって今は12月、冬である。そして、ジャックは今なのは家に帰っている途中だった。久しぶりの帰還……いったいなのははどうしているだろうか？

「帰ったぞ」

高町家について、何も動じず玄関のドアを開ける。そして、数秒たつとドタバタと激しい足音が2階の方からどんどん近づいてくる。

「ジャックさ〜ん!!」

「どわあ!？」

目に留まらぬ速さでジャックに何かが飛びついた。まるで、飼い主をずっと待っていた子犬のようにすり寄って来る。その正体は……なのはだった。

「ジャックさ〜ん!会いたかったですよお!!」

「こ、こら!離れんか!!」

「いやですよ!だって約束したじゃないですか!帰ってきたらたくさん甘えさせてくれるって!!」

「あ、あれは!クロノ達が勝手に!」

なのははジャックが強引に引き剥がそうとしたが、がっしりしがみ

ついて離れようとはしない。約束は守らないと！言いたげな顔でジャックを軽く睨む。そんな時、奥の方から救いの手が2人に近づいてきた。

「あれ？ジャックじゃない！久しぶり！！」

「ふふ♪楽しそうね♪」

「全然楽しくない！！」

高町家の桃子、美由紀だった。この2人なら助けしてくれると思ったが若干悪戯心が芽生えたのか、なのはは引き剥がそうとはせず、ニコニコと面白がって見ている。

「なのは！俺は少し用事があるんだ。だから、離れてくれ！」

「え〜！……じゃあ、帰ってきたら続き良いですか？」

「あ、ああ！」

自分でも少し単純すぎる嘘をついたと思うほどの嘘をなのはに言う。この場を離れようとする。なのはは最初は否定の声をあげるが、帰ってきたら甘えることを約束してジャックから離れた。

「早く戻ってきてくださいねえ！！」

逃げるように高町家を飛び出すジャック。なのははそんなジャックの後姿に言葉を投げつける。そんな言葉に耳を傾けようともせずD・ホイールを走らせた。

「ふう… やつと落ち着けると思ったら、余計に… 疲れたな」

冷たい風を感じながらジャックはD・ホイールで特にと言うほど行き場所もなくただ、時間をつぶすために走っている。

「……ん？ あれは……」

近くの公園を通りかかったところでジャックはとある少女を見つけた。しかし、少女の様子は少しおかしい。足が悪いのだろうか車椅子がある。だが、少女は自分の服を強く握ってなにやら苦しそうにしている。

「おい！ 大丈夫か？」

「… はあ… はあ… だ、大丈夫です。い、いつもの発作ですから」

そうは言っても少女の苦しみ方は尋常ではない。ジャックはこの苦しみ方を知っている。元の世界でのアポリアとのデュエルの時の龍可の苦しみ方によく似ている。

「無理をするな。今から病院に連れて行ってやる」

「え？ で、でも」

「でもではない！」

「わきゃ！？」

すぐに発作がおさまると言って病院に行こうとはしない少女をジャックは無理やり体を持ち上げD・ホールで慎重に病院まで走って行った。

病院に着くとジャックは早々と医者に少女を診てくれと頼み込む。幸い少女はこの病院に通院しているらしく担当の先生がいてすぐさま少女は治療することに。

「おい、あいつは大丈夫なのか？」

「大丈夫です。今は石田先生がはやてちゃんを診ていますから」

「はやて？（あの少女の名前か）」

自分が連れてきたから少女…はやての診断が終わるまで部屋の外で待っている。丁度、時間をつ潰せる良い機会だと思うジャックだった。しばらくして部屋から1人の白衣の女性が現れた。

「あなたがはやてちゃんをここまで運んできた人ですね？ありがとうございます。うございます。あんな風に苦しみ出すことが最近多いんですよ」

「そうなのか。それでは、俺は帰らせてもらう。もう大丈夫のようだからな」

はやての容体を聞いてジャックは少し気になったが、自分のはどうすることもできないためまた時間を潰すために何処かへ走ろうかと思いいその場を去ろうとしたが…。

「ちょっと待って！はやてちゃんがあなたに会いたいそうよ？」

「俺に？」

「ふふ、お礼を言いたいんじゃないかしら？」

しばらく考えた、ここで時間を潰してクロノの言っていた事件の捜査をするかとジャックは考えはやてのいる部屋に入って行った。

「あ、えと」

「ジャック・アトラスだ」

部屋に入ると先ほど苦しんでいた少女はやてがベットの中に入っていた。ジャックが中に入ってくると待ってましたと言わんばかりにベットから体を起こす。

「あの、さっきはほんまにありがとうございます！」

「気にするな。それよりもお前はそんなに体が悪いのか？」

「ちょっと違います、私は昔から足が悪いんですよ」

はやては自分のことを助けてくれた恩人に深々と頭を下げてお礼を言った。ジャックは近くにあった椅子に座りながら気にするなと言う。医者が言っていたことを思い出し気になったのではやてに聞く。先ほどは苦しみ方で体が悪いのかと思ったが、本人は昔から足が悪いと自分の足を触って苦笑しながら言う。

「そうだったのか。そういえば、はやてには家族はいないのか？はやてがこんなことになっているというのに見舞いにも来ないとは…」

「たぶん皆用事があつて来れないだけだと思います」

ジャックはそれでも自分の子供がこんな風になっているというのと目の前の笑顔を眩しい少女を見つめながら内心想う。それから、はやては自分の家族はこんな感じだと言う事を楽しくジャックに語る。おしゃべりする人がいて嬉しいのだろうか？

「あ、ジャックさん時間とかは良いんですか？何か用事とかあるんとちゃうんですか？」

「ん？そうだな……もう少しだけだったら大丈夫だ」

「そ、そうですか？じゃあ、次はジャックさんの事を話してくれませんか？」

「俺の、ことか？…あまり良い話はできんぞ？」

話すのに夢中で時間が結構過ぎている事に気づかなかったため夜になつていた。はやてはジャックに申し訳なさそうに声をかける。しかしジャックは時間を見てもう少しだけだったらいられると答え明るい表情で次はジャックの事を話してと頼む。そんなこんなでジャックは明日またはやての見舞いに来ることを約束して病院を去った。

「……ここも…誰もいないか……」

病院を去った後にジャックはクロノの言っていた事件の事で夜の街を走っている。さすがに時間带的に人は少ない。クロノ情報じゃ、

一般人は狙われず魔導師が集中的に狙われるらしい。

「次に行くか」

次の襲われた場所に移動しようとするとなにやら嫌な空気に包まれる。ジャックは一瞬にして戦闘体制に入る。

「誰だ！俺を狙おうとする馬鹿な奴は！！」

「誰が、馬鹿だ！誰が！！」

ジャックの軽い挑発に反応して後ろから声がした。振り向けばそこにはなのはやフェイトより少し幼いぐらいで、赤いゴスロリの服を着た少女がハンマーのような物を担いぎ逆の手には本が握られていた。

「おい、子供は寝る時間だぞ」

「誰が、子供だ！あんまりあたしをなめてつと…痛い目に遭うぜ！！」

2回も自分の事を侮辱されさすがに我慢の限界だったのか、担いでいたハンマーでジャックに襲い掛かる。

「この俺に喧嘩を売るとは…良い度胸だ！俺が全力で相手になってやろう！俺はこのモンスターを特殊召喚！来い、《バトルフェーダ―》！！」

「な、何だ！？召喚獣か！？」

「このモンスターは相手がダイレクトアタックしてきた時に特殊召喚できる。そしてバトルを強制終了させる!!」

少女のハンマーをバトルフェーダーが超音波のような音を鳴らし攻撃を阻止する。少女はさすがに驚きを隠せないようだ。

「お前…一体何者だ!!」

「ふん、良いだろう。聞きたいのなら教えてやる!俺は……ジャック・アトラスだ!!!」

第1話「王者と夜天の出会い」(後書き)

次回予告

「あたしのパワーに勝てると思うなあ!!」

「俺にパワーで挑んだことを後悔させてくれる!!」

「次回荒ぶる王者」魔法の世界で列を成す」

『パワー少女VSパワー王者』

ライディングデュエルアクセレーション!!」

第2話「パワー少女VSパワー王者」(前書き)

パワー対決…どっちが上でしょうね？

第2話「パワー少女VSパワー王者」

「行くぞ！アイゼン！！」

「ふん！俺に真っ向から攻めてくるとは…だったら！俺もそれに答えよう！！《バトルフェーダー》をリリースし《ビック・ピース・ゴーレム》をアドバンス召喚！」

ビック・ピース・ゴーレム

攻2100 星5

バトルフェーダーが消え、ジャックの目の前に巨大な岩が現れた。

「そんな岩！あたしが砕いてやるよ！！でりやああっ！！」

「向かい撃て！パワー・プレッシャー！！」

ぶつかり合うハンマーと岩。しかし、相手のハンマーの方が強かったらしくジャックのモンスターは粉々に砕けた。

ジャックLP4000↓3000

「ぐお！」

「へえ、召喚獣が破壊されると術者もダメージを受けるのか。だったら！全部あたしとアイゼンがぶち向いてやるよ！！」

「くそ！なめるな！俺はカードを伏せる！」

「おりゃあつ!!」

「畏発動!《スクリーン・オブ・レッド》!貴様は攻撃はできません!」

少女の足元から結晶が現れ動きを止める。ジャックはこれで動きを止めたと思った。しかし、少女は止まらなかった。

「こんな物!アイゼン!カードリッチロード!!」

「何だ!?!」

「ラケーテン・ハンマーツ!!」

少女が叫ぶとハンマーから弾薬みたいな物が1つ落ちる。すると、ハンマーが形を変えた。それはまるでくいのように鋭い物が付いたような感じだった。

その変形からブースターを展開させてハンマーで目の前にある結晶を砕いていく。ジャックはなんて力技だと驚く。

「ならば!俺のターンッ!!俺は《バイス・ドラゴン》を特殊召喚!そして《ダーク・リゾネーター》を召喚!」

「そんな雑魚を何匹呼び出してもあたしには勝てねえよ!!」

「これを見てもそんな減らず口が言えるか?レベル5《バイス・ドラゴン》にレベル3《ダーク・リゾネーター》をチューニング!!王者の鼓動、今ここに列を成す。天地鳴動の力を見るがいい!シンクロ召喚!我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》!!」

この寒々とした季節に炎の悪魔龍がその燃え滾る姿を現す。少女はその姿を見て、少し身を引く。

「（何だ、こいつ！召喚獣達を合成させた？…それにこの召喚獣の魔力…ハンパねえ！こいつを吸収すれば一気にページが稼げる！！）行くぞ！てめえの魔力頂くぜえ！！」

「我が《レッド・デーモンズ・ドラゴン》に逃げもせず挑むか。ならば！覚悟するがいい！！行け！敵を打ち砕け！アブソリュート・パワー・フォースッ！！！！」

「おりゃあああああッ！！！！」

真正面からぶつかり合うパワー！一歩も引かない2人！どっちが勝ってもおかしくない攻防だった。そして、勝負は…。

「うわああッ！！」

「レッド・デーモンズッ！？」

互角に終わった。少女は吹き飛ばされ、レッド・デーモンズ・ドラゴンはその場に倒れた。ジャックは自分の魂がやられたことに目を疑った。

「くっそお！！今度こそ！！」

ヴィータ、時間だ。引き上げるぞ

「な！？シグナム！今いいところなんだ！邪魔すんなよっ！！」

駄目だ！今は引き上げるんだ。主が心配するぞ

「…分かったよ！…おい！お前の名前もう一度教えろっ！！」

尻餅ついて少女はすぐさま体制を立て直しジャックを睨む。そして、攻撃しようとしたら念話が仲間から繋がる。どうやら、仲間の名前はシグナムと言らしい。

そして、少女…ヴィータは悔しそうに目の前にいるレッド・デーモンズ・ドラゴンを睨み言葉を吐き捨てる。そして、最後にジャックに名前聞く。

「ジャック・アトラスだ！覚えておけ！俺も言ったのだ、お前も名乗ったらどうだっ！！」

「ベルカの騎士…鉄槌のヴィータだ！お前の事忘れねえからな！ジャック・アホラス！！」

「なっ！？誰がアホラスだ！！俺はジャック・アトラスだ！！」

去り際にジャックの名前を叫ぶヴィータ。だが、間違えているのに気づかずそのまま去る。ジャックは自分の名前を間違えたことに訂正を要求するように叫んだが、届かなかった。

「あのちびっ子！！俺の名前を2度も聞いたと言っのに覚ええないとは！いったい！！何処の子供だあああっ！！！！」

ジャックは叫んだ。自分の名前を覚えてもらえなかったことに悔しがる。そして、今は叫ぶことしかできなかった。

「??????」

「ヴィータ、どうしたんだ？あんなに殺気だつて？」

「良い獲物がいたんだよ！魔力は……そう！AAはあつた！！」

「AA！？そんな魔力を持った魔導師がここにいたの？」

「いや、魔導師じゃねえ召喚獣だ！」

闇を街灯や車のライトで照らされるビルの屋上に先ほどにヴィータとその仲間が集まっていた。ヴィータの近くにいたピンクの髪をした女性はおそらく念話をしたシグナムと言う者だろう。

他にも、黄色の髪をしたおっとりとした女性、そして……狼？集まる人間の中に1匹だけなぜか狼を混ざっていた。

「ふむ、それでその召喚獣を操っていた者の名前は？」

しかも、喋れるらしい。

「えーと……たしか……ジャック・アホラスだったけかな？」

「アホラス？ずいぶんと間抜けな名前だな」

「（あはは……多分ヴィータちゃんが間違えて覚えているだけだと思うけど……）」

「ん？どうしたシャマル？」

やはり名前を完璧に覚えてもらえなかったジャック・アトラスだった。シグナムにも間抜けと言われる。そしてシャマルと言われた女性には心の中で「何処の誰だか知らないけど、ごめんなさい！」と謝っていたそうだ。

「とにかく！次に会った時は、ギッタギタにしてやる！！」

「私も会うのが楽しみだ」

「それじゃ、帰りましょ」

今日の作業を追え自分達の家に帰るシグナム達だった。彼女達はいったい何をしていただろうか？

（朝 高町家）

「なのは…そろそろ離れてくれないか…俺も忙しいんだ」

「い・や・で・す！そう言ってまた逃げるつもりなんでしょうけど…そうはいきませんよ！」

ジャックが高町家に戻ってきたのは朝日が見えるか見えないかという時間だった。そして、今どいう状況かと言うと…ジャック帰宅↓なのはに捕まる↓なのはが離れない↓ずっとこのままの順番である。

「だから、悪かったと言ってるだろう。俺は今日約束があるのだ。離れてくれ」

「約束？誰とですか？」

「昨日助けた病人だ。助けてくれたお礼に家に招待されているのだ」
昨日助けた病人とははやての事だ。はやては今日病院から家に帰って助けてくれたお礼のために料理を準備をしてくれているらしい。その時間まで後10分しかない。

「……分かりました。私も学校があるので……でも！帰ってきたら……覚悟するの！！」

「……ふう……さて……行くとするか」

病人と聞いてそれだったら仕方がないと言う顔でジャックから離れるのは。そして鞆を持って学校に行ってしまった。言葉を残して……。

ジャックは、なのはが離れたところでD・ホイールではやての家に向かう事にした。昨日去り際に地図を貰ったから迷うことはないだろう。

「地図通りだと……ここか……」

D・ホイールで走ることに6分、地図通りに進むと一件の家に辿り着いた。そこは、庭もあり一軒家としては少し高級に見える。本当に

「ここにいるのか？」と疑問に思うほどだった。

「はやて、来たぞ」

扉を開けるジャック。…この人はインターホンを慣らすと言う事を知らないのか？少し礼儀がなっていないジャックだった。

「あ、ジャックお兄ちゃん！いらっしやい」

「ああ。…家族はいないのか？」

「あ、うん。なんか、急な用事を思い出したとか言って出てってもうたんや。多分すぐ戻ってくると思うんやけど…」

ジャックの礼儀を気にせずに車椅子でゆっくりと近づいてくるはやて。そして、リビングの方に入るも他の家族がいないことにジャックは疑問を投げつける。すると、はやては頬をかきながら困った顔で説明。ジャックは「そうか」と頷き椅子に座る。

「ジャックお兄ちゃん。これ試食してくれる？」

「ん？これはお前が作ったのか？……ふむ、中々の味だ」

「ほんまに！よかった、ほんなら！次にこれ！」

こんな風にジャックははやての試作段階の料理を食べ感想を言う事になった。その後にデッキのカードを見せたりしていると昼過ぎになっていた。

「あれ？皆…帰ってきていへんなあ。どうしたんやろ？」

「……少し、外を歩いてくる。10分ほど戻ってくる」

「?う、うん。行つてらっしゃい」

昼を過ぎても帰つてこない家族を心配するはやて。そんな彼女を見てジャックは外を見て少し出てくると行つてその場を去った。

「……あんなに楽しそうに……あんな無邪気に笑えるのに……謎の病魔が体を蝕んでいる……か。……俺に何かできる事はないのか?」

あまり離れられないので、近くを散歩する程度でジャックは歩いている。昨日と今日ではやての事は大体理解した。足が不自由でなければ他の子供達と無邪気に遊んでいただろう。

「少しでもあの笑顔を保てるように、俺にできる事は一緒にいる事か。……ならば、戻るとしよう」

あの笑顔を少しでも保つために自分にできる事は一緒に笑い、喋り、遊ぶ、彼女のために……。

「戻ったぞ」

「あ、お帰り!ほんなら、お話の続きをしよう!」

「ああ」

この笑顔……自分は守れるか?

はやての家から戻り早速なのはに捕まるジャック。夕飯の時も離れず食が進まなかったそうだ。

そして、さすがに寝る時は離れてくれた。ジャックもこれで疲れが取れると思ったが…そうもいかなかった。なぜか、なのはが外を大急ぎで出て行く。

「これは、結界というやつか？……まさか！？」

外で見上げていた夜空はが赤く染まっていく。この現象は以前クロノから聞いたことがある。少し曖昧だったが、何とかひねり出す。思い出したジャックはエンジンをかけ結界の発生源のところにD・ホイールで向かう。

ジャックに勘が当たっていたら、あの少女がいる。レッド・デーモンズ・ドラゴンと互角に闘ったあの少女が！

今度こそ、決着をつけてやる！！俺の…魂でなっ！！

第2話「パワー少女VSパワー王者」(後書き)

次回予告

「言ったよな？あたしはギガ強えて」

「これが！キングが走る道だっ！！」

「ベルカの騎士に1対1で来るとは…面白い！！」

「ぐう！？何だ…この手は！？」

「次回荒ぶる王者！魔法の世界で列を成す」

『バーニング・ソウル奪われる？』

ライディングデュエルアクセレーション！！」

第3話「バーニング・ソウル奪われる？」（前書き）

今回は、まさかの！

なんか…久しぶりに投稿…少し文の構成を変えてみました。

第3話「バーニング・ソウル奪われる？」

「言ったよな、あたしはギガ強えって」

「ううう」

結界の発動源の所にいち早く気がついたなのははその発動者、鉄槌の騎士ヴィータと戦闘をしていた。初めはこちらが押しているかと思っただが、相手が謎のシステムを使い魔力を数段アップさせなのは意図も簡単に打ち負かしてしまったのだ。

そして、ヴィータは自分のデバイスをなのはに振り下ろす。やられる！なのははそう思いおもわず目を閉じてしまう。

「ごめん、なのは。遅くなった」

声の方を見るとそこには一時期離れ離れになったユーノ・スクライアが自分を庇うように抱き起こしていた。そして、目の前には…。

「んだあてめえは？ 仲間か！？」

そこには、あの事件を境に親友とも言えるほど仲良くなった……。

「友達だ」

バルディッシュをサイズフォームにして戦闘体制でヴィータを睨むフェイトがいた。

「フェイトとユーノがなのは守っているのか。ならば、俺は！」

崩れているビルの下で遅れて到着したジャックがD・ホイールからなのは達を見ていた。自分が助けようと思ったが、フェイト達が先に助けたのでどうするか悩んだが…答えは決まっている。ジャックは手に力を入れてアクセルを全開にする。

「これが！ キングが走る道だっ！！」

すると、ホイールが火花を散らし猛スピードで走り出す、空中を。これこそが、ジャックは使える魔法『キング・ロード』（自称）これによりジャックは空中を走ることができるのだ。走った道はアクセル全開なので走り去った後は炎龍が通ったように炎が微少に残るからクロノ達も処理が大変だと苦労しているそうだ。

「ヴィータッ！！ 俺も相手になってやるっ」

「てめえは！……ジャック・アホラス！！」

「アトラスだっ！！ いい加減覚えろ！ この馬鹿がっ！」

フェイトがヴィータと戦っているところにジャックが参戦する。ヴィータの背後にD・ホイールを止め叫ぶ。その声に反応してヴィータはジャックの名を言う。だが、相変わらず肝心なところは覚えていないようでジャックの怒りに触れる。

「だ、誰が馬鹿だっ！！」

「お前だっ！！ 行け！《ミッド・ピース・ゴーレム》！」

再びパワー馬鹿同士に対決が始まった。本来戦っていたフェイトを置いて。一瞬あの戦場の中に入って良いのか？と迷ったが、今は管理局に囑託魔導師として彼女を捕まえなくちゃならない。」

結局ジャックを手伝うことに。最初は2人から『邪魔をするなっ！』と同時に言われビクツと体が跳ね少し涙目になったがアルフも参戦して無理やりにもヴィータを拘束した。

「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えてもらっよ」

バルディツシュを突きつけ冷静に訪ねる。

「てめえ！ よくも邪魔したな！ あたしはコイツと勝負してたんだぞっ！！」

手足が動かないため顔でクイツとジャックの方を示し文句を言うヴィータ。

「その通りだ！ 俺とコイツの1対1の戦いを！ これでは俺が卑怯者みたいではないか！」

「え、え〜と…」

ヴィータとジャックの言葉に困った顔をするフェイト。アルフはそれを助けるように言葉を投げる。

「あんたら…仲が良いんだが、悪いんだか、どっちなんだい？」

「「悪い！…」」

悪いといいつつも息がピッタリ合う2人。そんな2人を見て苦笑いをするしかないアルフ。だが、その空気を壊すように何かが接近する気配をアルフは感知し叫ぶ。

「なにかヤバイよ!? フェイト!」

「え!?!」

その場を離れようとしたが遅かった。眼前に現れた女性は自分の得物を振り下ろしフェイトを後方に吹き飛ばした。

「うあああつ!!!」

「フェイトツ!」

ジャック達は吹き飛ばされたフェイトの方を見る。しかし、アルフには新たな敵が接近して来ていた。

「ぬおおお!!」

獣の如く凄まじい叫びと共にアルフに蹴りを叩きつける。アルフは左腕で防御をするが、衝撃を完全に殺す事は出来ずに蹴り飛ばされた。

そして、フェイトを吹き飛ばした女性の正体はシグナムだった。シグナムはヴィータを拘束していたバインドを解きなのはとの戦闘で落とした帽子を修正してヴィータにかぶせフェイトの方へと飛んで行く。

「貴様！ 待てっ！！」

「待つのはてめえだ！！」

シグナムを追いかけてようとするジャックだが、ヴィータによって遮られた。

「邪魔な小娘だ。貴様など俺の圧倒的なパワーで粉砕してくれる！！」

「だったら、あたしはさらに圧倒的なパワーでてめえを粉砕してやるよっ！！」

「なにい！！」

「なんだよっ！！」

睨み合う2人。この会話からはやはり相性は良いように感じる。

「俺の方がパワーは上だっ！ 《トップ・ランナー》を召喚！さらに、レベル4《ミッド・ピース・ゴーレム》にレベル4《トップ・ランナー》をチューニング！ 王者の鼓動、今ここに列を成す。天地鳴動の力を見るがいい！ シンクロ召喚！ 我が魂！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン

「出やがったな。こいつを倒して、お前の魔力！ 頂くぜ！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンを目の前に楽しそうな顔をしアイゼンから弾薬を1つ飛ばし突っ込んでくる。

「真っ向勝負か。いいだろう。来いっ！！ アブソリュート・パワ

ー・フォースッ!！」

「ラケーテン・ハンマーッ!！」

再びぶつかり合うパワーとパワー。また、引き分けかと思うところだがジャックはディスクのボタンを押し宣言する。

「暴発動! 《アサルト・スピリット》! このカードは発動時、モンスターの装備カードとなる。そして、ダメージステップ時に手札の攻撃力1000以下のモンスターを墓地に送ることです。送ったモンスターの攻撃力分、装備モンスターの攻撃力はアップする! 俺は、《ダーク・リペアラ》を墓地に送る!」

レッド・デーモンズ・ドラゴン

攻3000 ↓ 4000

「な!?! 魔力が上がった!?!」

「全てを砕け! アブソリュート・パワー・フォースッ!！」

魔力の上がつたことに驚くヴィータ。ジャックはその動揺を見逃さずに押し切る。

「うわあぁっ!！」

「どうだ! これが俺のパワーだっ!！」

吹き飛ばされるヴィータ。それを見て高らかに叫ぶジャック。

「この〜! なめるなあ!！」

「何度でも来るがいい！！ 俺がパワーで撃つ負かしてくれる！！
俺はカード2枚を伏せる」

「打ち抜けえ！！」

ブースターにより加速して突っ込んでくるヴィータ。

「畏発動！ 《シンクロン・リフレクト》。このカードの効果により貴様の攻撃を無効にする！」

「そんな物…打ち壊してやるよ！！」

「なにっ！？」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの前にバリアが展開。だが、ヴィータはお構い無しにバリアを壊してしまう。

「くらえええ！！」

「レッド・デーモンズ！！」

ジャックLP4000↓2400

今度はレッド・デーモンズ・ドラゴンが破壊された。ジャックには大きなダメージが襲い掛かる。

「くそっ！ だが、俺のレッド・デーモンズは何度でも蘇る！ 畏^{ウィキ}発動！ ライフを800支払い…蘇れ！ 《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！！」

ジャックLP2400↓1600

燃え上がる炎の中からレッド・デーモンズ・ドラゴンが復活。

「またかよ!」

「ふん。俺のレッド・デーモンズを倒したことは褒めてやろう。だが、コイツを倒せるか?」

「コイツ?」

「俺のターンッ! このモンスターは自分の場にシンクロモンスターが存在すると時特殊召喚できる。来い《クリエイト・リゾネーター》! さらに《アタック・ゲイナー》を召喚!」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの両脇に次々と現れるモンスター。そんなモンスター達にヴィータは鼻で笑う。

「はっ、何かと思えば魔力の低い雑魚ばっかじゃねえか! そんな奴等あたしとアイゼンで簡単に破壊してやるよ!」

「何を勘違いしている」

「なに?」

「こいつらは我が荒ぶる魂への繋ぎのためのモンスターだ!」

叫ぶとジャックの右腕にシグナーの痣が浮かび上がる。さらにヴィータは威圧感を感じた。

（おいおい！　なんだ、この威圧感は！？　魔力もいままでのものと段違いだぞ。いったいなにが出てくるっていうんだ！？）

そして、ジャックはシンクロ召喚をしようとした時、視界に魔力を蓄えているなのは姿が映った。

（なるほど、その大技でこの結果を破壊しようというのか。ならば俺はそのサポートをしよう）

「行くぞ！　レベル8《レッド・デーモンズ・ドラゴン》にレベル3《クリエイト・リゾネーター》とレベル1《アタック・ゲイナー》をダブルチュ…」

「ん？」

途中で言葉が切れるジャック。ヴィータはいったいどうしたんだ？　と思ひ見ると……ジャックの体から腕が突き出ていた。

（シャルカ…）

「なんだ？　この腕は！？」

同時刻シャルカはというと…

「よし！　捕まえた！　さっそく闇の書に魔力を…」

闇の書を出し魔力を注ぎ込もうとするシャルカ。だが、簡単にはいかなかった。

「……ッ!? な、なに!？」

クリアルヴィントでジャックに繋げた空間から紅い光がシャマルを襲う。

（くそっ!……力が…抜ける…。これでは《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》を召喚できん。……ならば!）

「俺は……このまま結界を壊す! 灼熱の……」

薄れていく意識の中ジャックは最後の力を振り絞り叫ぶ。

「クリムゾン・ヘルフレアアアアアッ!!!」

灼熱の炎が解き放たれる。タイミング良くなのはのスターライト・ブレイカーも同時に解き放たれ結界に命中。その2つのパワーに負け結界は破壊された。

「チッ! 結界が破壊されたか!」

ここは一旦引くぞ!!

「おう!」

結界が破壊されたことによりシグナム達はその場を猛スピードで離れる。

そして同時刻アースラでは、結界が破壊されたことによりモニターが映るようになった。映った皆の姿を見て安心をしている場合ではなく、逃げる4つの光を焦りながら検索するエイミィ。

「に、逃げる！ ロック急いで！ 転送の索敵を！」

『やっています！』

「あれは……」

キーを叩く音が絶えない。そんなエイミイの隣でクロノはモニターを見て顔を引き締める。

「クロノ君ごめん、逃げられた。…クロノ君？」

エイミイはキーを叩くの止め謝る。

「第一級搜索指定遺失物ロストロギア……闇の書……」

クロノは拳を強く握り締めた。そこへユーノから通信が入った。なにやら焦っている。

『クロノ！』

「どうした？」

『なのはとジャックさんが大変なんだ！』

モニターにはバツタリと倒れているジャックとなのはが映っていた。クロノは近くにいたオペレーターに治療の準備をするようにいう。

「今から、アースラに転送をする。転送が終ったら治療をする！」

『わかった！』

そして数分後ジャック達はアースラに転送された。

一方そのころ逃げたシグナム達は、いつもの集合場所のビル屋上にいた。

「今回は無茶をしすぎだぞ？ お前が傷つけば主が悲しむ」

「わかってるよ。…それよりもシャル、あいつの魔力はどれぐらいページを稼げたんだ？」

「……8ページよ」

少し、沈んだ顔でいうシャル。さらにそれを聞いたヴィータは少し残念そうな顔をした。

「なんだよ、たった8ページかよ。あいつの魔力だったら15ページはいくと思っていたんだけどなあ」

「……ヴィータちゃんのいう事は正しいと思うわ」

「？ どうゆう意味だ？」

シャルは自分の手を握って説明するように喋る。

「彼のリンカーコアから魔力を取ろうとしたら………なにか別の力に阻まれたのよ」

「別の力？ ……それってあいつが出そうとしていた召喚獣か？」

「わからない。だけど、彼の力は計り知れないわ。十分気をつけましょう?」

「「ああ」」

「うむ」

話がすんだところで彼女達を帰るべき所に帰っていった。次に彼：ジャック・アトラスと会う時は、お互い気をつけようという合って……。

第3話「バーニング・ソウル奪われる？」（後書き）

次回予告

「やっぱり、あの手で行きましょう」

「ここがフェイトの新しい家か」

「久しぶりね！ ジャック・アトラス！」

「お前は！？」

「あ、あの……これ……これって……」

「ほう…良かったな、フェイト」

「次回荒ぶる王者、魔法の世界で列を成す」

『王者と魔法少女達の休日』

ライディングデュエルアクセレーション!!」

第4話「王者と魔法少女達の休日」（前書き）

はじめましての方ははじめまして！ そうでない方はお久しぶりで
す！ ユーザー名は変えましたが私は漆黒のカリスマです！

今後は黒松霊暫としてよろしくお願いします。

……何も書く事が無いので本編へどうぞ。

第4話「王者と魔法少女達の休日」

「——ッ。ここは……」

わずかばかり痛みが走るジャックの体。静かにまぶたを開けていく。そこは見知らぬ天井だった。

……いや、ここはたしか。

「失礼しまーす……」

自分の居る部屋を思い出そうとした刹那、プシューと自動ドアの開く音と共に小さな声でフェイトが入って来た。

「フェイトか」

「ジャック！ 起きて大丈夫なの？」

「ああ。それよりもあれから俺はどのくらい眠っていた」

ジャックは気になっていた。自分が倒れてからの敵の動きを。実際戦ったジャックだからこそわかる。今回の敵は生半可な力では一瞬にしてやられてしまうことを。

「えっと、ジャックはあれから一日半は眠っていたよ。それと今のところ敵の動きは無しだよ」

「そうか」

それを聞いたジャックはベットから出て近くにかけてあったコー

トを着る。

「ジャック？ 何処に行くの。もう少し寝てたほうが…」

「俺はこの程度の疲労、元の世界に比べたら月とスッポンだ。それに早く復帰し奴等を叩きのめさねば」

そう。ジャックは元の世界で今より数倍の痛み、疲労を経験している。それにヴィータとの決着をつけたい、と魂が荒ぶっているのだ。

「それじゃあ、わたしも手伝うよ。わたしももっと強くなりたいし」

「そうか。ならば共に強くなろう！」

「うん！」

あれから数日が経ち、ジャックは無駄に元気になりいつもどおりにモーニングコーヒーを飲んでた。ジャックが元気になったのはいいが、なのははいまだに感知せず魔法が使えない。何で少し元気がないように見える。

「どうしたなのは。魔法が使えないのがそんなに悲しいか？」

「…はい。最初は魔法って危ないものだな、って思っていました。正直に言って魔法があったからこそ強くなれたし、ジャックさん、

フェイトちゃん、ユーノ君、クロノ君、リンディさん、エイミィさん、いろんな人達と出会うことができました。だから……」

ズズ、とコーヒーを一口飲みジャックは上を見上げる。

「そうだな。俺も似たようなものだ。デュエルがあつたからこそさまざまな者達と出会い、戦いがあつた。俺もデュエルができなくなつたらお前と同じ気持ちになるだろうな」

「……」

「だがな」

ジャックは言葉を続けた。

「少しは休んだほうがいい。万全の状態ではなくては皆の足を引っ張ってしまうからな」

「にやはは。ジャックさんが言っても説得力がないですね」

「そのとおりだな」

「あ、クロノ君」

少し元気を取り戻したところでクロノが2人の傍に居た。

「話中すまないが、すぐに集まってくれ」

「……何かの作戦か？」

「ああ」

「それでどうするつもりだ？ 俺はいつでも奴等と戦えるがなのははまだ万全じゃない」

集まったはいいがどんなプランでいくか検討中である。

「やっぱり、あの手で行きましようか」

リンディの突然の言葉に局員達は理解する事は出来なかった。

「さて、私達アースラススタッフは今回ロストログア『闇の書』の捜索及び魔導師襲撃事件の捜査を担当する事になりました。ただ、肝心の『アースラ』がしばらく使えない都合上、事件発生時の近隣に臨時作戦本部を置く事となります」

「近隣？」

その言葉に少しばかり疑問に思うジャック。

「分割は観測スタッフはアレックスとランディに」

「はい……」

リンディの言葉にアレックスとランディは即座に返事をした。そして、続けて後ろの局員に視線を向ける。

「ギャレットをリーダーとした捜査スタッフ一同！」

『はい!!』

ジャック、なのは、フェイト、ユーノ、クロノ、エイミー以外は役割が決まったが残りの者は…。

「そして、司令部は私とクロノ執務官、エイミー執務官補佐、ジャックさんとフェイトさん。以上三組に分かれて駐屯します。ちなみに司令部は、なのはさんの保護も兼ねてなのはさんのお家のすぐ近所になります」

笑顔でさらりと言い放つリンディ。

「なん…だと…」

驚きを隠せないジャック。フェイトとなのはは少し嬉しそうな顔をしている。さて、これから一体どうなってしまふのか？

「そうかぁ。疲労で倒れたならしょうがあらへんなぁ」

「ああ。心配かけてたな」

ジャックは久々にはやての家にお邪魔しているとところだった。相変わらず家族の方は出かけているようで姿を確認できないでいる。

「はやては大丈夫なのか？」

「うん。心配あらへんよ。このとおり元気百倍や！」

本人はそうは言っているが油断はできない。また突然発作に襲われる可能性が高い。

「ん？ すまないはやて。そろそろ戻らねば」

ジャックははやての様子を見るため早めにこちらに来ていたのだ。予定時間が近づいているためジャック席を立った。

「そうなん？ それじゃまた来てなジャックお兄ちゃん」

「ああ」

「ここがフェイトの新しい家か」

出るときにリンディに渡された地図どおりにD・ホイールを走らせ到着したジャック。聞いていたとおりなのは家から近い距離だ。

「さて、フェイト達の部屋は…」

そう呟きマンションに入ろうとすると。

「久しぶりね！ ジャック・アトラス」

「お前は！？」

そこに居たのはなのはの親友のアリサとすずかだった。ここに居るということはおそらく2人はなのは達に会いに来たのだろう。

「お久しぶりです。ジャックさん」

「ほんと久しぶりよねえ」

「ああ。それよりお前等はなのは達に会いに来たのか？ そうであれば付いて来い。俺も今からそこへ向うところだったからな」

ジャックはそう言いマンションの方へと歩き出して行った。

「何よ付いて来いって！ ちょっと！ 待ちなさいよ！」

「あ。待つてよアリサちゃん！」

アリサはジャックの言葉に怒りを抑えきれずダッシュで追いかけて行った。すずかも慌ててアリサの後をわたわたしながら追いかけて行った。

「ふむ。相変わらずいい香りだ」

なのは達と合流したジャックは翠屋でコーヒーを飲みゆっくりしていた。リンディはなのはの両親によろしくと挨拶をしている。

「そういえば、フェイトちゃんは三年生ですよ？ 学校はどちらに

「？」

（学校…か。はやても足さえ治れば行けるのだろうな）

そんな事を考えているとカランカランと音がなりフェイトが何か箱のような物をもって入って来た。

「リンディていと……、リンディさん」

「なあに？」

フェイトの問い掛けに笑顔を向けるリンディ。

「あ、あの……これ……これって……」

「これは……」

ジャックはフェイトの箱の中身を確認した。そこにはなのはやアリサ、すずかが通っている聖祥学園の制服が入っていた。

「転校手続きとつといたから、週明けからなのはさんのクラスメイトね」

「まあ素敵！」

「聖祥小学校ですか。あそこはいい学校ですよ」

突然のことで戸惑うフェイト。自分は学校と言う場所に行った事が無いためどう対処すればいいか分からないのもあるが、この嬉しさをどう表現すればいいか分からず黙ってしまう。

「ほう…良かったな、フェイト」

「ジャック？」

「絶好のチャンスだぞ。これからはもっと友達を増やし『フェイト』として頑張っていくんだ」

「！ ……うん、そうだね。ありがとうジャック。ありがとうござ
います、リンディさん」

「はい。どう致しまして」

笑顔が広がる店内。ジャックの言葉はフェイトに届いた。そして
リンディからの気持ちも。

——これからは私自身の人生が始まるんだ。

「ところでジャックさん？」

「ん？ 何だ」

喜んでいるフェイトを眺めているとリンディがジャックに笑顔で
問い掛けてきた。

「さっきの言葉と表情。まるでお兄ちゃんのようにだったわ」

「兄…か。フツ、悪くはないかもな」

まんざらでもないジャックだった。元の世界ではあまり子供と関
わっていなかったため初めはどう対処していいか分からなかったが、

今はこんな穏やかな生活も悪くは無い、と思うようになっていた。

その日の夜、シグナム達は再び『闇の書』への魔力収集を行うべくいつもの集合場所のビルの屋上になっていた。

「管理局の動きも活発化してくるだろうから…これまでのようにはいかないわね」

深刻に話シヤマル。そうあの戦闘から管理局の動きは活発化し始めている。あの戦闘で分かってしまったハンパな覚悟じゃ…やられる、と。

「少し遠出になるな。別世界での収集になるか」

「今何ページだっけ？」

ヴィータの問い掛けにシヤマルが闇の書を開き確認する。

「……三百四十八ページ。この間の白い服の子と…途中で収集を中断した白いコートの人でかなり稼げたわ」

「くそお…もつとアイツから収集できたらもつといたただろうに！……まあ、悔やんでもしかなねえよな。おし！半分は稼げたわけだしズバツと集めて完成させよう！早く完成させて静かに暮らすんだ…はやてと一緒に…」

ヴィータの言葉はとても悲しそうなだった。他の騎士達もどこか悲しそうな顔をしていた。

「……行くか。もうあまり時間がない」

「ああ」

ザフィーラの言葉にシグナム達はデバイスを起動させ騎士甲冑を装備する。

「それじゃ、夜明け時までここに」

「ヴィータ、あまり熱くなるなよ？」

「わあてるよ」

シグナムの言葉に少し反論するヴィータ。そしてシグナムはその言葉に続いて。

「本当に分かっているのか？ お前はジャックという男の事となるとすぐ熱くなる。家の会話でも主はやてがその男の話になると少し様子が変だったけど、本当に……」

「だから！ 大丈夫だって！ アイツはただ……その……ぶったおしいだけだ……！」

そんな言葉を残しヴィータは一人何処かへと飛んでいってしまった。

「どうしたんだアイツは？」

「さあな」

ヴィータの行動に若干困った顔になってしまふシグナム。ザフィ
ーラは無表情で答える。

「ふふ。とにかく、皆気をつけてね？」

「ああ」

「うむ」

シャマルの言葉に頷きそれぞれの収集場所へと飛び去って行った。

一方先の戦いで破損したレイジングハートとバルディッシュを修理しているエイミィの後輩、マリーはいくら調整してもエラーコードが出てしまい頭を悩ませている。

『——それで部品交換と修理は終ったんですけど、エラーコードが消えなくなつて』

「エラー？ 何系の？」

「ええ。必要な部品が足りないって…今データの一覧を」

頭を悩ましているデータをエイミィに転送するマリー。

「あ、来た来た。…え？ 足りない部品って…これ？」

『はい。これ…何かの間違いですよね？』

エイミイも驚く足りない部品のデータ。

【エラーコードE203 必要な部品が不足しています】

【エラー解決のための部品”CVK-792”を含むシステムを組み込んでください】

『二機ともこのメッセージのままコマンドを受け付けません。それで困っちゃってて…』

（レイジングハート、バルディッシュ…本気なの？）

真剣な顔でモニターを睨むエイミイ。それもそのはずだレイジングハート達が必要としている部品は…。

（”CVK-792”ベルカ式…カートリッジシステム）

そうシグナム達が使っていたシステムだった。

【お願いします】

レイジングハート達は悔しかったのだろう。主人を守れなかったことが……。

第4話「王者と魔法少女達の休日」（後書き）

次回予告は考えていません。

最近忙しいのでいつ投稿できるか。

もしかすると、明日かも！……できるかな？

とにかく！ この作品を楽しみにしてくれている方々のためにも頑張ります！

あ、いつもどおり誤字脱字があればどうぞよろしく願いします！
感想也大歓迎です！

それではまた次回！！ リリカルマジカル頑張ります！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8306s/>

荒ぶる王者～魔法の世界で列を成す～

2011年10月17日00時00分発行